

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XIV-1

1987

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XIV-1

—— 長浜市神照寺坊・泉町西遺跡・松塚遺跡 ——

1987

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりこんでいます。特に、文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と保存に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに、昭和61年度に実施しました県営ほ場整事業に係る発掘調査の結果を6分冊に分けて取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会

教育長 飯田志農夫

例　　言

1. 本書は昭和61年度県営ほ場整備事業に伴う長浜市神照寺坊・泉町西遺跡、同市松塚遺跡の発掘調査報告書で、昭和61年度に発掘調査し、整理したものである。
2. 本調査は県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、
側滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、長浜市教育委員会の協力を得た。
4. 本書で使用した方位は平面直角座標系方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部　正
課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林　博通
主任技師	葛野　泰樹
管理係主任主事	山本　徳樹

側滋賀県文化財保護協会

理事長	南　光雄
事務局長	中島　良一
埋蔵文化財課長	近藤　滋
調査三係長	兼康　保明
技師	浜崎　悟司
技師	三宅　弘

(松塚遺跡試掘調査)

総務課長	山下　弘
主事	泉　喜子
嘱託	中谷サカエ

6. 本書の執筆・編集は、調査担当者浜崎悟司が行った。
7. 出土遺物や写真、図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

I 長浜市神照寺坊遺跡・泉町西遺跡.....	1
1. はじめに.....	3
2. 調査の方法と経過.....	3
3. 神照寺坊遺跡の調査.....	3
(1) 遺構.....	3
(2) 遺物.....	6
(3) 小結.....	9
4. 泉町西遺跡の調査.....	11
(1) 調査区の概要.....	11
(2) 遺物.....	13
(3) 小結.....	14
II 長浜市松塚遺跡.....	17
1. はじめに.....	19
2. 調査の方法と経過.....	19
3. 調査の結果.....	19
(1) 各区と遺構.....	19
(2) 遺物.....	22
4. まとめ.....	23

図版目次

- I 長浜市神照寺坊遺跡・泉町西遺跡
- 図版一 神照寺坊遺跡 遺路
(1)調査前状況 (2)I U地区全景
- 図版二 神照寺坊遺跡 遺跡
(1)HM地区全景 (2)HM地区東部
- 図版三 神照寺坊遺跡 遺跡
(1)HMW地区全景
(2)HM地区S D-3 木製品出土状況
- 図版四 神照寺坊遺跡 遺跡
(1)MK地区全景 (2)MK地区全景
- 図版五 神照寺坊遺跡 遺跡
(1)HM地区SK-5
(2)HM地区SK-2
(3)MK地区SB-1
(4)HM地区SK-4
- 図版六 神照寺坊遺跡 遺物
- 図版七 神照寺坊遺跡 遺物
- 図版八 神照寺坊遺跡 遺物
- 図版九 神照寺坊遺跡 遺物
- 図版一〇 泉町西遺跡 遺跡
(1)調査前状況 (2)4区全景
- 図版一一 泉町西遺跡 遺跡
(1)1区全景 (2)1区全景
- 図版一二 泉町西遺跡 遺跡
(1)3区全景 (2)3区SE-1付近
- 図版一三 泉町西遺跡 遺物
- 図版一四 神照寺坊遺跡・泉町西遺跡 調査区
- 図版一五 神照寺坊遺跡 遺構
- 図版一六 神照寺坊遺跡 遺構
- 図版一七 神照寺坊遺跡 遺構
- 図版一八 神照寺坊遺跡 遺物
- 図版一九 神照寺坊遺跡 遺物
- 図版二〇 神照寺坊遺跡 遺物

図版二一 泉町西遺跡 遺構

図版二二 泉町西遺跡 遺構

図版二三 泉町西道路 遺物

II 長浜市松塚遺跡

図版 一 遺跡

(1)調査前状況 (2)調査風景

図版 二 遺跡

(1)1区全景 (2)1区SD-1 (3)1区SD-2

図版 三 遺跡

(1)2区全景 (2)2区南半

図版 四 遺跡

(1)2区SD-1とSD-2 (2)SD-1遺物出土状況

図版 五 遺跡

(1)2区SD-3とSD-4 (2)SD-3遺物出土状況 (3)SD-4遺物出土状況

図版 六 遺跡

(1)3区全景 (2)3区沼沢地堆積状況 (3)5区全景

図版 七 遺物

図版 八 遺物

図版 九 遺物

図版 ○ 遺物

図版 一〇 調査区

図版一一 遺構

図版一二 遺構

図版一三 遺構

図版一四 遺物

図版一五 遺物

図版一六 遺物

挿図目次

I 長浜市神照寺坊遺跡・泉町西遺跡	
第1図 HM地区S D-3木製品出土状況	6
第2図 神照寺坊遺跡主要遺構配置図	10
第3図 3区S D-1・2遺構図	12
第4図 3区S E-1遺構図	12
II 長浜市松塚遺跡	
第1図 2区S D-1遺物出土状況	20
第2図 2区S D-3遺物出土状況	21
第3図 2区S D-4遺物出土状況	21



本書所収の遺跡（上）と周辺の主な道路（下）

4：八角堂遺跡、5：森遺跡、10：十里町遺跡、12：新庄馬場遺跡、13：神照寺坊遺跡、14：魚町西遺跡、17：口分田北遺跡、
19：国友遺跡、23：松原古墳群、25：越前塙遺跡、59：高田遺跡、63：川崎遺跡、112：宮司遺跡

第 I 章 長浜市神 照寺坊・泉町西遺跡

1. はじめに

神照寺坊遺跡は、長浜平野の北部、新庄寺町に所在し、從来、神照寺関連の遺跡として周知されていたところである。神照寺はN 13° W の方位をもつ坂田郡条里の景観の中に、正方位の地割をもって現在まで存続する古刹である。『近江奥地志略』が引く神照寺縁起及び『興福寺官務帳錄』によれば、創建は宇多天皇治世の頃に遡り、中世には数百の坊舎を有したという。現在なお、寺の南方には寺院関連の字名が多く残され、寺の保有する文化財にも平安後期の半肉彫千手觀音立像があるなど、その歴史の古さがしのばれる。

今年度、この神照寺北方の水田地帯には場整備事業が行われることになり、それに先立ち発掘調査を行うことになった。

また、昭和60年度遺跡地図の改訂によって、泉町内に泉町西遺跡の存在が周知され、この地にも、今年度事業としては場整備が行われるため、急撰発掘調査の必要が生じた。

当報告は、これらの発掘調査の成果をまとめたものである。

神照寺坊・泉町西の両遺跡は、姉川左岸の標高98~93mの東から西に傾斜する沖積地上に立地している。周辺には、近年、発掘調査により、大きな柱根をもつ建物群が検出され、福永厨家跡かとも考えられる新庄馬場遺跡などがあり、古来坂田郡内において、重要な位置を占めていたことが知られる。⁽¹⁾

なお、現地調査にあたっては、地元新庄寺町・泉町の方々をはじめ、姉川左岸土地改良区などの関係機関には多大なる御協力を得ることができた。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

2. 調査の方法と経過

まず、遺跡の範囲とその地下深度について知る資料を得る目的で、工事による切土及び排水路計画箇所に2×4mを基本とする試掘坑を設定した。その結果、神照寺北方と、泉町西縁部において遺跡の存在が確認されたに至った。この資料をもとに、関係部局と協議を行い、工事により遺跡への影響が避けられないと考えられた地区について、図版一四に示すような調査区を設定して発掘調査を行い、記録の収集と保存をはかることとなった。

現地調査は、神照寺坊遺跡については、試掘調査を昭和61年4月、発掘調査は同年5~7月に、泉町西遺跡については、試掘調査を昭和61年7月、発掘調査は同年8月に行った。特に、泉町西遺跡の調査においては、猛暑の中、遺構面の乾燥が著しく、遺構の確認は困難をきわめた。

3. 神照寺坊遺跡の調査

調査地点は4ヶ所にわたる。それぞれ小字名をとってI U地区、M K地区などと呼称することにする。調査にあたっては、工事基線方位に合わせてグリッドを組み、H M地区の南東に仮の原点を設けている。以下、各調査区の概要と遺物について述べる。

(1) 遺構

イ、 I U地区（図版一五）

字井ノ上の西端に当る地点で、南北80m、幅3~5mにわたって調査を行った。第Ⅰ層：耕作土(20cm)、第Ⅱ層：灰褐色砂質土(20cm)を除去して、遺構面である砂礫層あるいは青灰色粘土層に至る。遺構検出面の標高は95.9m前後を測る。

検出された遺構には、中世前期の素掘溝3条、柱穴4基がある。また、調査区中央では沼沢地状の落ちこみを検出した。その中央の深掘の結果によれば、さらに西側に深くなる状況が知られた。試掘時の所見によれば、東に20m離れた試掘坑41・42でも同様の落ちこみを検出しており、南北23m、東西25m以上の規模となる。当沼沢地の北端で中世前期の堆積、南肩口で古墳時代前期の堆積を認めたが、全体にわたって奈良~平安時代の土器を包含する黒色粘質土が厚く堆積している。

ロ、 HMW地区（図版一五）

字ヒハタ町の西端に当る部分の、畦畔が西側に三角形状に広がった箇所に南北17m、幅1~7mにわたってトレチを設定した。耕作土15cm、灰褐色粘質土20cmを除去して遺構検出面である青灰色粘土に至るが、調査区西壁は現存畦畔下に当り土層はやや複雑な堆積を示していた。遺構検出面の標高は94.2mを測る。小範囲の調査区ではあるが遺構面は西に向かって低くなり、西側では暗茶褐色腐植土の遺物包含層が残っている状況が取扱われた。検出された遺構には、溝3条がある。

S D-1 調査区中央を走る素掘溝でSD-2を切る。方位はN13°Wにあり、検出面での規模は、幅2m、深さ25cmを測る。現存畦畔の方向に一致する点が注目される。

S D-2 調査区中央を東西に走る溝で、SD-1及びSD-3に切られる。埋土は灰色の粗砂であり、幅1m、深さ10cmを測る。

S D-3 調査区西端で検出された狭小な素掘溝で、SD-2及び暗茶褐色腐植土の遺物包含層を切る。埋土は濁灰褐色粘質土であり、現状畦畔の張り出しに対応するように屈曲をみせるところから、畦畔が乱れをみせるようになって以降の所産であろう。

ハ、 HM地区（図版一六）

字ヒハタ町南東の水田一筆分に調査区を設定した。

第Ⅰ層：耕作土20cm、第Ⅱ層：灰褐色砂質土15cmを除去した第Ⅲ層：青灰色粘土層上面が遺構検出面である。検出面の標高は95.1~94.9mを測り、西側へ緩やかな傾斜をもつ。また、調査区南北両辺では地山が若干の高まりをみせ、元来の遺構面がかなり削平されていることを窺わせた。遺構は建物跡2基、土坑9基、溝3条、柱穴列2基、ピット數十を検出した。

S B-1 調査区北東で検出された掘立柱建物跡で、桁行2間(3.8m)、梁間1間(2.6m)を測る、東西棟建物である。掘方は径35cm前後の略円形を呈し、柱痕は径15cm前後である。

S B-2 調査区南西で検出された掘立柱建物跡で、桁行・梁間それぞれ1間分(2.4~2.7m)のみ検出しが、大半は調査区外に広がる。柱穴の掘方は一辺45cm程度の隅丸方形を呈し、柱痕は径18cm程度である。

S K-1 調査区東部で検出された土坑で2×1.6mの不整形プランを呈する。埋土は5cm大のレキ混りの黒色粘質土である。検出面からの深さは最大20cmを測るが底面は凸凹が著しく一定ではない。検出時に陶器壺片を土坑中央上面で採取している。

S K-2 SK-1の北にある土坑で、検出面での長軸1.6m、短軸1.2mの略椭円形を呈する。深さ50cmあり、青灰色粘土層を掘り抜いてはいないが若干の湧水をみる。坑底はほぼ平坦である。壁が一部オーバーハング

しており、また、発掘時においても側壁の崩落が著しかったことから、当初の規模はやや小さかったものと考えられる。坑底に部分的に砂質の堆積がみられた他は粘質系の埋土であった。砂質土上面で円形の板(63)を検出した他、3層上面で竹と思われる木棒が横倒しの状態で発見されている。本土坑の機能としては井戸が想定されるが、側壁を保護する施設については検出されておらず、不明である。

S K - 3 S K - 2 の北にある土坑で、検出面で径65cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。当初、柱穴かと思われたが、埋土は黒色粘質土単純であり、皿状の坑底には木ノ葉を混えた薄い粗砂の堆積がみられた。機能は不明であるが、ある一定期間オープンな状態にあったものであろう。遺物としては埋土中から土師器皿片が少量出土した。

S K - 4 調査区南部や西寄りで検出された土坑である。検出面で1.05m × 0.5m の長方形プランを有し、主軸はほぼ真北を指す。坑底は中央や西北寄りで卵形の落ち込みを有する二段掘りの形状を示す。最深部で深さ30cmを測る。北側の段部で土師器皿(21)が裏向きの状態で出土している。

S K - 5 調査区中央で検出された土坑で、1.15m × 0.5m の長円形プランを呈する。底は椀状であり南壁はオーバーハングする。表面がかなり炭化した巨木1本が斜めに納められており、暗茶褐色粘質系の埋土には、この巨木由来すると思われる炭化物が多量に混じっていた。巨木処理用の土坑であったものと思われる。

S K - 6 S K - 3 の北西に位置する土坑で、60cm × 50cm の隅丸長方形プランを呈する。検出面からの深さは20cmをはかり、底は皿状である。埋土は黒色粘質土であり、底には砂の堆積が薄く認められた。遺物は出土していない。本坑の機能は明確にし難いが、埋土の状況より判断して、S K - 3 と同様な時期に同様な機能を果たしていた可能性が大きい。

S K - 7 S K - 2 の東に位置する土坑である。東半部が調査区を外れているため、全体のプランは不明であるが、検出された部分でみると、S K - 6 と同様の形状を示すものと思われる。埋土は黒色粘質土である。

S K - 8 調査区南西の拡張区で検出した土坑で、一部調査区外にかかるが、長軸80cm短軸55cmの長円形を呈している。底は西側に一段テラスを有する。検出面からの深さは30cmをはかる。埋土は炭化物混りの暗茶褐色粘質土で、土器片を多く含んでいた。廐棄用の土坑であろう。

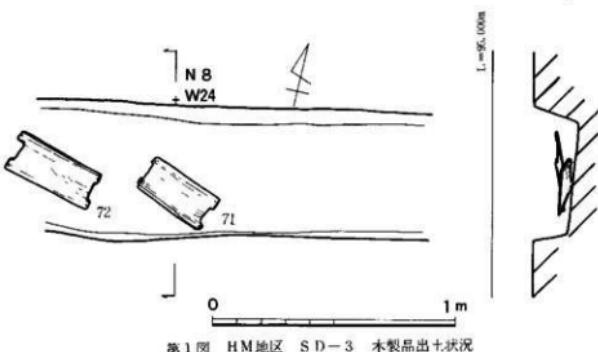
S K - 9 S K - 8 の北西に接して検出された土坑で、径50cmの略円形プランを有する。当初、柱穴の可能性を考慮し、柱痕跡の検出に努めたが、確認できなかった。埋土には多量の炭化物及び灰が含まれていた。

S D - 1 調査区北東で検出された素掘溝で、幅20cm、深さ10cmを測る。長さ1m 分が検出された。調査区内で立ち消えとなる。埋土は黒色粘質土で、中世前期の土師器皿2点(38・39)を含んでいた。

S D - 2 調査区南東で検出された素掘溝で、幅20cm、深さ5cmを測る。長さ1m 分が検出されたが、調査区内で立ち消えとなる。埋土は黒色粘質土で、遺物は検出されなかった。形状・埋土等の点において、S D - 1 と非常によく似た溝である。

S D - 3 調査区北西～中央北部にかけて検出された素掘溝で、調査区内でL字形に曲折する。東西16m、南北9mにわたって検出され、検出面での幅は40～60cm、深さは5～25cmを測り、曲折部で最も浅くなる。断面U字状を呈する。方位は東西溝部分でN84°E 南北溝部分でN1°Eで厳密には直交しないが、極めて強い企画性が認められる。西端で側板状木製品(71・72)が出土した(第1図)他、全域で計21点のモモ果が発見された。

その他、調査区西部には多数のビットが認められたが、建物としてまとめるることはできなかった。ただし、P20のように柱根が遺存しているものがあり、本調査区内外にさらに幾つかの建物が存在していたことが推定されよう。



第1図 HM地区 SD-3 木製品出土状況

二、MK地区(図版一七)

字森の北の水田に東西30m、南北28mにわたって調査区を設定した。第Ⅰ層：耕作土20cm第Ⅱ層：灰褐色砂質土20cmを除去して遺構検出面に至る。遺構検出面は、調査区南部～西部にかけては青灰色粘土層、北部～東部にかけては灰色砂礫層のそれぞれ上面である。検出面の標高は95.1～94.9m前後であり、西に向かって緩やかな傾斜をみせる。検出された遺構には、建物跡1基、溝6条がある。

SB-1 調査区北西隅で検出した掘立柱建物跡で、桁行1間(1.7m)、梁間2間(4.1m)分を検出したが、さらに桁行は調査区外の北方へ伸びる。掘方は一辺40cmの隅丸方形で、柱痕跡は径15cm前後である。なお、梁間中間の柱跡については掘方は検出されず、柱痕跡のみ検出できた。

SD-1 調査区南部を直線的に東西に走る溝で、長さ28mにわたって検出した。SD-2・3がとりつく。方位はN74°Eである。検出面での規模は、東端で幅80cm、深さ5cm、西端で幅1.3m、深さ20cmを測る。西端の溝底のレベルは、東端より30cm低くなっている。溝の断面形はU字状を呈する。埋土は黒褐色土で、西部では腐植質を含んでいる。また、ところどころ溝底に砂あるいは砂質土の堆積をみた。東から西への流水があつたものと思われる。土器・木簡(69)・齊串(70)などの他、全城にわたって計15点のクルミ果が出土している。

SD-2～6 南北方向に走る素掘溝で、方位ほぼN16°Wで一致する。それぞれ黒褐色のよく似た埋土をもち、断面はU字形を呈する。SD-2は調査区中央で終わり、SD-4～6は調査区内で浅くなり、消える。これらの溝のうち、SD-2・3はSD-1に直交してとりつき、埋土に切りあい関係をみないこと、溝底にレベル差がないこと、SD-1を越えてのびないことが知られ、これらの素掘溝群が、最終埋没の直前にはSD-1と有機的な関係を持っていたものと思われる。

その他、調査区内には、N78°Eの方向に走る2条の畦畔状遺構が認められた。これらはSD-2～5の上をわおってのびており、それら溝群が埋没して以降のものである。

(2) 遺物

A. 土器(図版一八・一九)

IU地区沼沢地出土土器 1～4は下層淡灰褐色腐植土から出土した古式土師器である。7は高杯脚部で、筒状部は10面を取っている。内面にはシボリメが残り、外面には黒色物質が付着する。9・10は須恵器杯である。

共に灰白色を呈し、やや軟質である。外底部には回転ヘラ切り痕が残る。18・19は灰釉陶器碗である。18は器壁のやや厚い底部からやや腰の張った体部をもち、低平な角高台が付く。内全面と外面腰部までハケヌリによって施釉され、内外の底面には、トチ痕が残る。19は、器壁の薄い底部で、三日月高台が付く。内全面と外面は高台端まで、ハケヌリによる施釉が認められる。内面と、高台接地面に溶離・溶着がみられる。

H MW地区出土土器 SD-2出土品(42-44・47)と暗茶褐色廣植土出土品がある。土師器杯(42-44)はいずれも口縁部をロクロナデで仕上げる浅い器形のものである。口縁端部を軽く外反させるもの(43・44)、丸く收めるもの(42)がある。皿は端部を面取るもの(45)である。46・47は須恵器杯である。46は底部から曲折して直線的に外上方にのびる体部をもち、口縁部はわずかに外反して端部を丸く收める。細くて貧弱な高台が付く。外面上位に「X」字状の線刻が認められる。47は内側した体部をもつやや深い器形で、口縁部はわずかに外反する。外底に黒色物質が付着し、現に使われた可能性がある。

H M地区出土土器 すべて遺構に伴うものである。SK-4出土のものは土師器のみである(21-24)。略完成形で出土した21は、口径13.2cm、器高3.0cmをはかる杯である。底部外面に回転ヘラ切痕を残し、外反気味に開く口縁部は、内外をロクロナデして端部は丸く收める。口縁端部には、周の内にわたりて黒色物質の付着が認められ、この杯が燈明用に使われていた可能性を示す。SK-8出土土器には土師器(25-28)、須恵器(30-32)がある。土師器杯は口縁部をロクロナデし、端部を丸く收めるもの(25・26)と内面に浅い沈線状の段をみるものの(27)がある。土師器皿の28は端部に面をもつ。須恵器杯蓋(30・31)は、くびれの小さな低平な宝珠つまみをもち、天井部からふくよかにカーブして縁部に至り、縁部をわずかに折り返している。杯(32)はやや厚手のつくりである。還元炎焼成が十分ではなく、内面及び外底面は橙灰色を呈している。SD-3出土土器には土師器(29)、須恵器(33・34)がある。土師器杯は摩滅が著しいが、口縁部上位で斜上方に一旦ひき出し、端部を内側へ肥厚させるものである。須恵器蓋底部(34)は、丸味をもって立ち上る体部直下に、端面が立つしかりした高台が付く。SK-2出土土器には土師器皿(35-37)がある。口径8.5cm前後のもの(35・36)と13cm前後のもの(37)がある。35・36はともに内面中央を一方向にナデ、口縁部を時計回り方向にヨコナデする。底部外面はオサエのままでヌメリがみられる。胎土は精良で、橙灰色を呈する。SD-1からは土師器皿2点(38・39)が出土している。完形の39は口径8.0cmをはかる。内面中央を一方向にナデ、口縁部を時計回り方向にヨコナデして作る。外底部はオサエ痕を残す。胎土に若干の砂粒を含み、淡灰茶色を呈する。SB-1の柱穴からは土師器皿が2点出土している。40は建物北西隅の柱穴から出土したもので、薄手の器皿をもち、ヨコナデで作り出された口縁部は小さく、復原口径8.2cm(口縁部残分)に対し、器高は0.8cmとさわめて薄平である。外底部は手捏ね痕が残る。胎土に若干の砂粒を含み、色調は淡灰茶色を呈するが、外面の口縁への立上り部に淡青紫色の変色帯をみる。41は建物北東隅の柱穴から出土したもので、推定される口径は12.5cm前後。胎土に砂粒を混じえ、色調は灰白色を呈する。

M K地区出土土器 すべて溝状遺構出土品である。48は口縁部にロクロメを顕著に残す土師器杯で、胎土は精良なものを用い、色調は淡黄灰色を呈する。49は須恵器長頸壺の頸部である。内外面に降灰が著しい。肩部との接合は「三段接合」になるものと思われる。50-52は須恵器杯蓋である。口径15.5cmに復元推定されるもの(50・51)と口径17.2cmと推定されるもの(52)がある。径15.5cmの例はともに天井部に広い平坦部を有し、器高が1cm強と低い。52は縁部に向かって天井部がゆるやかにカーブし、前者に比べて器高が高くなる。また、口縁端部の折り返しが前者に比べてシャープである。50・51は天井平坦部にメタを残すなどやや作りに難しさがみられる。52は天井部上位を回転ケズリで仕上げている。53・54は高台のつく須恵器杯である。ともに、底部から明瞭に曲

折する直線的な体部をもち、角形の幅広で低い高台が付く。55～57は須恵器杯である。55・56が口径12cmをはかり、53・54に近似するが、57は口径14cm以上になる。55は器高4.7cmをはかるやや深い形態をもつ。56は、体部がやや内擣氣味に立ち上がる。底部のヘラ切り痕はナデにより消去され、青灰色を呈する。57は、やや焼成の甘いもので、あるいは土師器かと思われる。外面にロクロナデによる凹凸を頗著に残す。繩文土器(図版六 73)はSD-1の東部溝底より出土したものである。器厚は5mm前後で、暗褐色を呈し、焼成は良好である。

B. 木製品 (図版一九・二〇)

各地区で木製品が出土した。本報告ではその大半を収録している。

59は火鑼板である。2×3cmの断面長方形の角材の側面に、2～2.5cmの間隔をおいてV字状の切欠きをいれる。腐朽が著しく、一部確認が困難であるが、6カ所認められる切欠きのすべてに対応して表裏いずれかの面に火鑼印をとどめる。60・61は表面を粗く削って作られた小木片で、縱断面は先端の鋭く尖った楔形、横断面は台形を呈する。材は密なものを用い、端面は特にかたい。楔として使用されたものかと思われる。MK地区SD-1から出土した。62・63はそれぞれ径12.8、13.3cmをはかる円形の板である。周縁に63は5カ所、62は残存部で2カ所、木釘痕がある。63では、そのうちの2本が2cm間隔に接している。曲物の底あるいは蓋として機能したものであろう。なお、63は2片に割れているが、その断面には、2カ所木釘が打ち込まれている。補修されたものであろう。62はMK地区SD-5、63はHM地区SK-2から出土した。64は断面が扁平な長円形を呈する棒状木製品である。欠損している側が太くなる。表面は手なれしており、端部寄りで黒く焦げている部分がある。MK地区SD-1から出土した。65は細長い板材の一端を丸く、もう一端を主頭状にカットしたもので、上下に1カ所ずつ木釘痕がある。MK地区SD-4から出土した。66・67は皿である。輪縁によって整形されている。内外面に多数の刃痕が残る。ともにMK地区SD-3から出土した。69はMK地区SD-1から出土した木筒で、幅3.4cm厚さ5mm、残存長13.7cmを測る板材の両面に崩痕が認められる。片面はほとんど読めないが、もう片方の面には2行書きで以下のように記されている。

〔芻須カ〕〔百一カ〕

・寺前出□□女稚□□□

〔須カ〕

惠好□□□女卅□

(2)

内容は、稻の収穫に関するメモ的なものと思われる。「寺前出」の「寺」が何を指すのか現時点では明らかでないが、○○寺というような記述はとておらず、既知のことのように単に「寺」と表現されている点を考慮すると、当地で記されたものとの判断も充分可能であろう。70はMK地区SD-1から出土した齊車で、長さ11cm、幅1.9cm、厚さ1mm内外を測る。上端は主頭状、下端は斜先状につくり、主頭部の両斜辺の下位にそれぞれ1カ所の切込みをいれる。71は短筒型の板の両端中央を、その厚み幅で長方形に切欠いてそれぞれ両端に出納を作り出した板で、長さ30.0～30.6cm、幅11.8～12.3cm、厚さ1.7cmを測る。長い方の側縁に薄い化粧材が木釘により3カ所でとめられる等、納部・側縁に合計14カ所の木釘痕がある。72も同形同大のもので、化粧材を欠失する他は細部の特徴に至るまで71と一致する。元来、箱状のものの、向き合った位置にある2枚の側板であったものであろう。化粧材の存在から、上部がひろく開口したものであることが推定され、あるいは橋であったものかと思われる。

C. 遺物小結

今回出土した土器について若干の年代的な考察をしておきたい。

まず、I J 地区出土の土器は大きく3期のものに分けることができよう。すなわち、長浜市高田遺跡等で知られる1~4の古式土師器の時代のもの、同宮司遺跡等で知られる5~12・18~20の時代のもの、そして、13~17の時代のものである。⁽⁴⁾

次にHM地区出土土器であるが、出土遺構毎に土器群を比べると、SK-2・SD-1・SB-1等外面に手挫ね痕を残す薄手で小法量の土師器皿を含む一群と、須恵器を出土するその他の遺構出土の群に分けることができよう。また、須恵器の出土をみなかったSK-4の土器群については、SK-8出土土器との類似性から、後者の一群に組みいれることができよう。

後者の土器群については、市内森・八角堂遺跡33・34トレンチ出土のものに類例が求められる。森・八角堂遺跡での分類をもとに、本遺跡出土土器との比較を試みると、八角堂で多量に出土している土師器杯A-2類は、本遺跡でも出土している。ただし、当遺跡においては、器形の大略を知りうる資料に乏しく、完形品はSK-4出土の21のみである。21については八角堂遺跡のものに近い形態・法量を示す例がある。また、八角堂遺跡でB類とされた高台付の杯、皿a類とされた「て」の字状口縁を有する皿は、各地区的遺構群出土のものには細片も含めて存在しない。また、皿b類は、SK-4に1例ある(22)。また、土師器杯において、本遺跡で少量認められる、口縁部内面に浅い沈線をもつものは、八角堂例には含まれないようである。須恵器についてみれば、本遺跡出土の大形の杯蓋は天井部がふくよかなカーブを描いて縁部に至るに対し、八角堂例では、低平な天井部から屈折した、直線的な器形である。また、端部の折り返しも、本遺跡に比べて、八角堂例はかなり甘くなっている。以上のような点に多少の異同を指摘することができる。

さて、湖北地方、滋賀県内のこの時期の土器研究の現状を勘案するに、「て」の字状口縁をもつ皿(八角堂a類)は平安時代中期以降に盛行るものといわれ、杯の口縁部内面の沈線、須恵器杯蓋の端部の折り返しが強いなどの特徴は、明らかに奈良時代の特徴の残存形態として理解できるものである。

従って、HM地区出土の土器群のこれまでに検討してきたもののうち、SK-4のものについては、八角堂遺跡33・34トレンチ土器群のものを前後する時期、SK-8出土分についてはそれよりやや古い時期を想定しておきたい。八角堂遺跡33・34トレンチ出土土器群が9世紀後半に比定されていることから、各土器群の年代観の大略が得られよう。

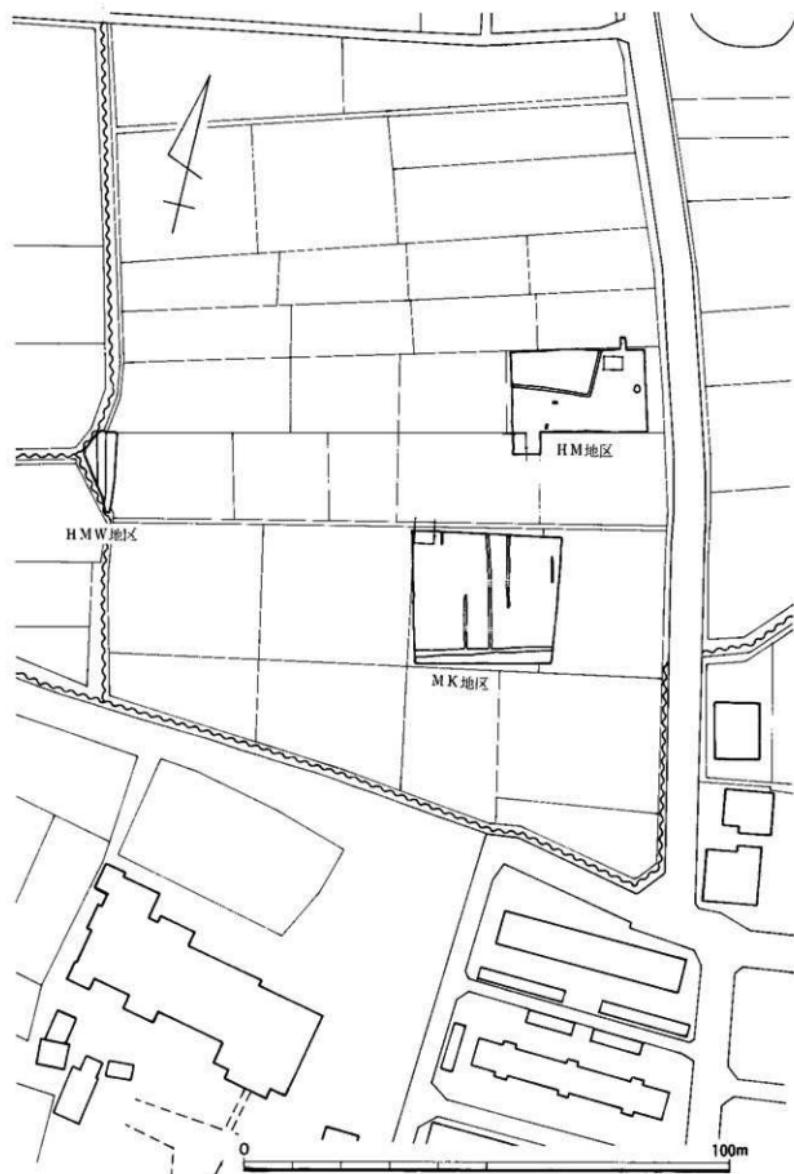
また、小法量の土師器皿については、直接年代を知ることは難しいが、中世京都J期新段階(13世紀後半)のものに法量的に近い例が多い。山茶碗類の伴出が一切なく、この点は留意されねばならないだろう。⁽⁶⁾

HM地区の土器には包含層出土品と溝出土品があるが、現時点では遺物群に顕著な時期差は認め難い。土師器杯でみれば、SK-8出土のものよりやや浅い器形が想定され、須恵器杯の高台は、かなり退化して弱々くなっている。以上の点からここでは、HM地区SK-8出土の土器群よりやや新しく、森・八角堂遺跡33・34トレンチ出土土器群と同様か、やや新しい時期に比定しておきたい。

MK地区の出土遺物には、さほどの時期幅はないものと考えられる。須恵器杯Bの高台・杯蓋の端部のおり返しは、HM地区SK-8のものよりさらにしっかりしており、それよりやや古い時期が考えられる。平城宮土器Vとの類似性から、奈良時代後半のものと考えられよう。

(3) 小 結

今回の調査で判明した上述の事柄について、特に、HM・MK地区分について若干の考察を行うことにより、簡単なまとめとしたい。まず、遺物の年代が遺構の年代を示すものに、HM地区では、SB-1、SK-2・4



第2図 神照寺坊造跡主要造構配図

・8、SD-1、MK地区ではSD-1・3・4、HM地区SD-1がある。これらは9世紀代を中心とする群と13世紀代を中心とする群に大別される。また、埋土、方位、位置関係などを考慮すると、HM地区SD-2、SK-3・6・7は、同地区SB-1あるいはSK-2などと近い時期（13世紀）のもの、その他は、9世紀代の遺構群と有機的な関係にあったものと推定される。

中世前期の遺構群については、分布がHM地区、それも東部のみに限られている。SB-1は、日常の居住の場としては、1×2間とやや小規模な建物であり、物置小屋的な施設と考えるのが妥当であろう。ただし、井戸跡と考えられるSK-2の存在は、SB-1を単なる水田地帯の納屋とは違う、居住地の一角落と考えるべきことを示している。この時期の遺構が今回の調査区内では西に広がらないことが明らかになったため、今後、試掘坑37・56などで確認した遺構群との時期的な関連が、当時既に存在した神照寺及びその周辺の歴史を考える上で重要な意味をもってくるであろう。

9世紀代前後に比定したその他の遺構群については、まず、正方位にきわめて近いHM地区SD-3の帰属年代が問題となろう。出土した溝内の遺物は少量であり、溝の存続年代には、遺物の面からは決めてとなる十分なものが得られていない。むしろ、今後、神照寺自体の創建年代が明らかにされることによって、この溝はその開削年代の上限を求められるであろう。今回の調査ではその他には神照寺の創建年代に直接ふれる資料は得られなかつたが、注目したいのは、奈良時代後半に埋没したとみられるMK地区SD-1と直交する北方の小溝群、及びSD-1から出土した木簡に記された内容である。MK地区SD-2～6は耕作閑連溝との性格付けがなされている素掘溝にその特徴が合致し、埋没前に、MK地区の大半は耕地であったものと思われる。SD-1出土の木簡には明らかに「寺前田」と読める字句があり、「恵好」なる僧の名前（？）もみえる。「寺」が具体的に何を指すか明らかではないが、内容は、現地的なものであり、この時期、調査地近辺に「寺」が存在していた可能性がある。この「寺」と神照寺との関係は明らかでなく、今後の調査結果によって、検討を要する課題となろう。ここではSD-1の東方への延長部が、隣の泉町内をぬけ、新庄寺町字火打の北西を斜行して流れる農業用水が、現在の神照寺域の北辺へと向きを変えて流れる屈曲点に正しく方向を向けてのびることに留意し、寺域の整備のためにSD-1が寺北辺へとつけ替えられた可能性が考えられることを指摘するにとどめる。

その他、HM地区西部の遺構群、MK地区SB-1等については、SK-4・8等によって平安時代前期に、その存続年代の一端をおくことは明らかであるが、その始まりと終わりについては、それを示す明確な資料を得られていない。また、それが得られたにしても、神照寺の創建年代の如何によってその評価はかなり異なったものとならざるを得ない。ここでは、性急な結論を求めることなく、これら9世紀代前後の遺構群については発見の報告にとどめることにしたい。

4. 泉町西遺跡の調査

調査地点は、泉町集落の西縁にあたる字内田町に属する。南北方向の排水路計画箇所と、それに隣接する切土工事予定箇所である。調査にあたっては、N13°Wの基準線を設定し、便宜上、調査区を北から1～4区と分割して呼称した。以下、各区の概要と遺物について述べる。

(1) 調査区の概要

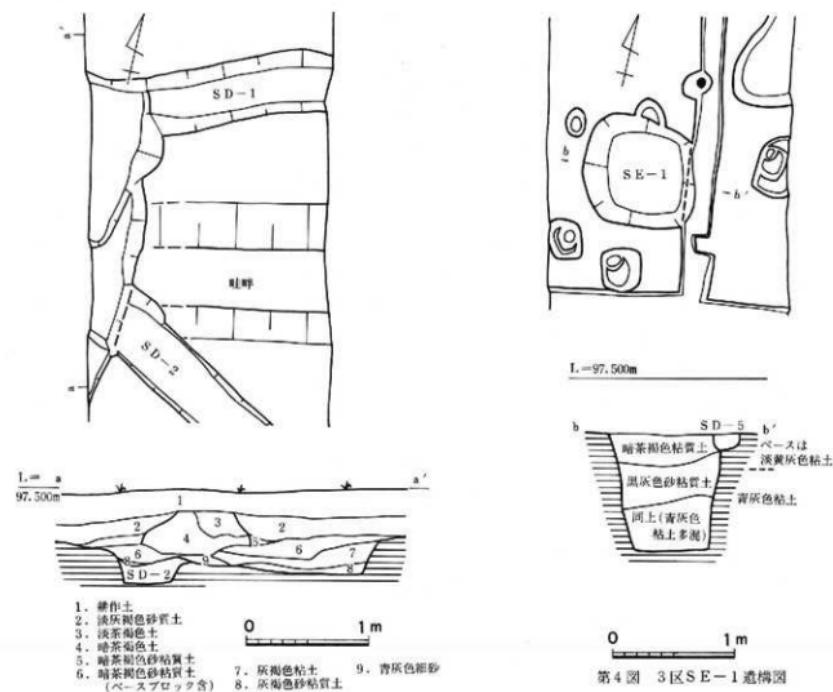
1区（図版二一）は調査区北端の排水路及び切土予定地である。ここでは、SD-2・3に区画された内側で

多数の柱穴が検出された。しかし、現地で明瞭に構造物としてまとめられたものは、SB-1とSA-1の2つにとどまる。なお、遺構検出面は、地表下35~40cmの黄褐色粘土層上面であり、東部では灰色砂礫層上面がこれにあたる。標高は97.2m 前後を測る。

SB-1 2×2間の身舎をもつ掘立柱建物である。方位はN16°Wを指す。東・北・南の3方に各1間分の廟が付く構造となり、南北9.6m、東西6.2mの規模を有する。柱間は、東西が2.05m でほぼ一定であるのに対し、南北は北の2間が各2.25m、南の2間が各2.55mを測る。掘方は径40cm程度の略円形、柱痕は径15cm程度である。

SA-1 調査区北部でSD-3の南側に沿うように検出された柱穴列である。方位はN88°Eを指す。3間分(7.1m)を検出したが、東方へはまだびる可能性がある。柱間は、西から東へ2.5m、2.5m、2.1mを測る。掘方は径30cm内外の略円形を呈し、柱痕のわかる例では、径15cm程度の円形を呈する。

SD-2 SD-3南北溝の西1.5mに並走する素掘溝で、長さ10.5mにわたって検出した。方位はN9°Wを指す。検出面での幅は0.8m、深さは約20cmである。北端は明瞭におわり、南部は次第に浅くなり調査区内で立ち消えとなる。断面形は深い皿状を呈する。



第3図 3区 SD-1・2 遺構図

S D - 3 調査区北西で直角に曲がる素掘溝で、南北10m・東西12mにわたって検出した。方位はN 9° Wを指す。検出面での規模は、南北溝部分で幅0.8m・深さ20cm、東西溝部分で幅0.6~1.1m・深さ20cmを測る。南北溝の南部は並走するS D - 2と同様、調査区内で立ち消えとなる。断面形は浅い皿状を呈する。

2区は、1区に南接する排水路予定地である。造構検出面は、地表下40cm前後の黄褐色粘土層上面であり、その標高は北部で97.3m・南部で97.1mを測る。北部で、建物跡を構成するとみられる柱穴を数基検出したが、それ以南では耕作関連のものとみられる細溝以外に明瞭な造構はみられず、この状況は3区S D - 1まで、約22mの間つづく。また、2区最南部では、3区S D - 1までの8mの間、細溝すらみられない無造構地区となる。

3区(図版二二)は、2区以南、現用の農業用水路までの間の排水路予定地である。造構検出面は地表下50cm前後の黄褐色粘土層上面であり、南部では若干青味がかる。検出面の標高は、南部で96.9mを測る。検出された造構には、溝・土坑・井戸・柱穴・河跡などがある。ここでは主な造構に限って記述する。

S E - 1 3区南部より検出された井戸で、南北方向の素掘溝S D - 5に切られる。検出面で一辺70~90cmの不整方形を呈し、深さは95cmを測る。底は平坦で、側壁はほぼ直にたちあがる。側壁を保護するような施設は検出されていない。本来、素掘りの井戸であったものであろう。日照りが長く続いた最中にもかかわらず、底で若干の湧水をみた。

S D - 1 3区北部で東と南方向にのびる屈曲点付近が検出された溝で、S D - 2を切り、畦畔におおわれる。東西溝部分での規模は、幅50cm・深さ25cmを測り、断面はU字形を呈する。

S D - 2 調査区内で唯一、方向を大きく違える溝で、南北東一北西方向にのびる。S D - 1に切られる。検出面での規模は、幅40~50cm・深さ30cmを測り、断面はU字形を呈する。

S R - 1 3区南端で検出した落ちこみで、底部に砂礫の堆積をみたことから河跡と判断した。検出面での規模は、幅1.8m以上・深さ85cm以上を測る。現用の農業用水路のすぐ北側にあたり、その旧態である可能性がある。

4区は、農業用水路以南の部分である。造構検出面は地表下50cm前後の青灰色粘土層上面で、標高は97.1m前後をはかる。検出された造構には、溝・土坑がある。北半部の東壁際で南北14mにわたって検出された溝は、深さ45cmをはかるしっかりしたもので、側壁は直に近い。大半が調査区外にあり、全容は明らかでない。また、南半部では、辺60~80cmの方形の土坑4基が、70~90cmの間隔をおいて、一列に並んだ状態で検出された。すべて深さ5cm程度の浅いもので、遺物の出土は、少量の土器細片に限られる。

(2) 遺物(図版二三)

今回の調査で出土した遺物は、そのほとんどが土器であり、他に微量の石製品・木製品がある。その量は、整理用コンテナ8箱程度であるが、それらの大半は細片化したものであり、図化できるものは、ごく限られる。

S B - 1 出土土器(1~13) 土師器皿(1~8)、山茶碗(11~13)、白磁(9・10)がある。1・2・4・7・8・10~12はP 4、3・13はP 11、5はP 3、6はP 10、9はP 9からそれぞれ出土している。土師器皿には大皿(7・8)と小皿(1~6)がある。口縁部が内彎してのび、端部は丸く收める。山茶碗には、胎土に粗い砂粒を多く含むもの(11・12)と、さほど砂粒の混入がみられないもの(13)がある。11は、わずかに腰の張った体部に外反する口縁部をもち、端部は丸く收める。12は断面三角形の低い高台の付く底部で、外底面には糸切痕を残す。13は、やや腰の張った器形になるものと思われる。断面三角形の高台がつぶれ、台形を呈し、接地部分に多量のモミ痕がつく。白磁皿(9)は、ゆるやかに内彎する体部に直線的に外に聞く口縁部を有する。

内全面と外表面部までに施釉する。釉は透明に近く、細かな貫入をみる。なお、体部内面に櫛歯状具による施文がみられる。白磁碗(10)は、厚手の底部から直線的にのびる体部を有するもので、高台を幅広く削り出している。内面の底部と体部との境が、鋭く沈線状に凹む。内全面と外面上位に淡緑色を呈する釉が施されている。

以上SB-1出土の土器について、現在行われている土器編年上の位置を求めてみる。まず、土師器皿では、⁽⁹⁾破片も含めた検討で、口縁部が内側して立ち上がる形態のものに、ほぼ限られる。これは、横田洋三氏の編年案にいうA₂タイプの土師皿である。また、山茶碗の口縁部の外反・高台がつぶれ、モミ痕を残す等の特徴は、藤沢良祐氏の示すところによる。⁽¹⁰⁾山茶碗第4型式前後に相当するものと思われる。白磁碗は、大宰府での分類の碗IV-1類に相当する。横田氏のA₂タイプ皿は11世紀後半～13世紀前半に、⁽¹¹⁾藤沢氏の第4型式は12世紀中頃に、それぞれ比定され、白磁碗IV-1類の盛行期が11世紀後半～13世紀とされることから、これらの土器群は12世紀中頃のものと考えるのが妥当であろう。

その他の土器では、SB-1の時期を明らかに遡るものとして、1区P1143出土の灰釉陶器(34)などがある。口縁部につけ掛けによってごく薄く施釉され、丸味をもった器体にわずかに外反する口縁部を有するもので、編年上、百代寺窯期に位置付けられる。一方、SB-1出土土器より後出のものとして、P1135出土の土師器(26～28)⁽¹²⁾があげられる。これらはいずれも、底部から屈曲して直線的な口縁部がのびる器形をもつ。これは横田氏の分類A₂タイプ皿にあたる。

以上のことから、遺物からみた遺跡の年代は、11世紀中頃から14世紀を前後するころと考えられ、遺物の量的な割合から判断されるところでは、その盛期は11世紀末～12世紀中頃といえよう。

(3) 小 結

今回の調査では、これまで散布地としてしか知られなかった泉町西遺跡の、集落としての一端を知る手がかりが得られた。特に、1・2区、3区の遺構群はそれぞれ1単位のものとみることができ、1・2区では南北33mの間に、北から、区画溝・柵列・母屋・畠地などがある屋敷地の状況が想定されよう。また、3区では、南部に井戸をそなえた1単位の集団の居住地の様子がうかがえよう。

しかし、これらの景観復原については、未だ時間上の吟味が不十分であり、すべてが同時に存在したものとは言い切れない。むしろ、柱穴の数、遺物の時期幅から考えて、数期にわたる変遷を考えねばならないだろう。

註

- (1) 吉田秀則「長浜市新庄馬場・塚山遺跡」(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会「は場整備関係遺跡発掘調査報告書」XIII-4 1986)
- (2) 当木簡の釈読については、鬼頭清明氏をはじめ、奈良国立文化財研究所員の方々から御教示を得た。記して感謝致します。
- (3) 宮成良佐「高田遺跡調査報告書」長浜市教育委員会 1980年
- (4) 宮成良佐「宮司遺跡・十里町遺跡調査報告書」長浜市教育委員会 1977年
- (5) 田中勝弘「長浜市森・八角堂遺跡」(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会「は場整備関係遺跡発掘調査報告書」IX-1 1984年)
- (6) 宇野隆夫「遺物の考察」(京都大学埋蔵文化財研究センター「京都大学埋蔵文化財調査報告」II 1981年)
- (7) 小笠原好彦・西弘海「平城宮～墳の大別」(奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告」V 1976年)

- (8) 八尾博之「中近世素振り小溝について」(奈良県立橿原考古学研究所『矢部遺跡』 1986年 所収) など
- (9) 横田洋三「土師器皿の分類と編年観」(財)古代学協会『平安京左京四条二坊十三町一長刀鉢町遺跡一』 1984年) 及び横田氏教示による。
- (10) 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」(瀬戸市歴史民俗資料館『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』 I 1982年)
- (11) 横田寅次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」(九州歴史資料館『九州歴史資料館研究論集』 4 1978年)
- (12) 楢崎彰一「猿投窯の編年について」(愛知県教育委員会『愛知県古窯跡群分布調査報告』Ⅲ 1983年)
- (13) 注(9)と同じ

第II章 長浜市松塚遺跡

1. はじめに

松塚遺跡は、長浜市桜木町地先に所在し、従来古墳として周知されていたところである。本年度、この地一帯にほ場整備事業が行われることとなり、それに先立つ発掘調査が行われることになった。当報告は、その調査成果をまとめたものである。

当遺跡の所在する桜木町付近は、姉川左岸の標高109~112m前後の沖積地にあたり、豊かな水田地帯の一角を占めている。⁽¹⁾ 北西1kmには弥生~古墳時代の大集落と目される国友遺跡、南方1kmには弥生~古墳時代の墓域で⁽²⁾ある越前塚遺跡等があり、當地に古くより開発の手がおよんだ可能性を示唆していた。

なお、現地調査においては、地元桜木町の方々から多大なる御協力を得ることができた。この場を借りて改めて厚く御礼申し上げたい。

2. 調査の方法と経過

まず、遺跡の範囲とその地下深度について知る資料を得る目的で、工事による切土及び排水路計画箇所に2×4mを基本とする試掘坑を設定した。その結果、排水路部分で数ヶ所にわたって遺跡が認められるに至った。関係部局との協議の結果、図版-1に示すような調査区を設定して発掘調査を行い、記録の収集と保存を計ることとなった。

ここでは記述の都合上、北の調査区から順次1~5区と呼称するが、現地調査においては3区以南の試掘調査を昭和61年4月、発掘調査は7月、3区より北の試掘調査を同年9月、発掘調査は10月にそれぞれ行った。

3. 調査の結果

(1) 各区の概要

1区 (図版-1)

施工後、桜木町字下日ウラと今町の境界となる東西方向の排水路部分にあたる。幅1.8m、長さ92mにわたって調査区を設定した。調査にあたっては、2区の割付主軸との交点を起点とする、N77°Eの軸線を設定した。

1区の基本層序は上から、第Ⅰ層：耕作土25cm、第Ⅱ層：淡灰褐色砂質土17cm、第Ⅲ層：黄褐色粘質土5cm、第Ⅳ層：暗茶褐色土礫混8cmでほぼ一定している。第Ⅳ層には上部細片が含まれる。遺構はこれらを除去した、黄灰色粘土層の上面で検出されたものである。検出面の標高は110m前後で、高低はほとんどない。検出された遺構には、溝2条、落ちこみ・ビット各1がある。

S D-1 W90付近を南西~北東方向に走る溝で、検出面での幅は1.1~1.6m、深さ60cmを測る。西側にテラス状の段をもつ断面V字形の溝であり、埋土は砂と炭化物混じりの砂礫の互層である。

S D-2 W95付近を南西~東北方向に走る溝で、断面形はU字形を呈する。SD-1と並走することから、先後関係にある同機能の溝とも考えられるが、埋土はSD-1と同様炭化物混じりの砂礫と砂の互層であり、むしろSD-1と同時にきわめて短期間に埋没した可能性が考えられる。

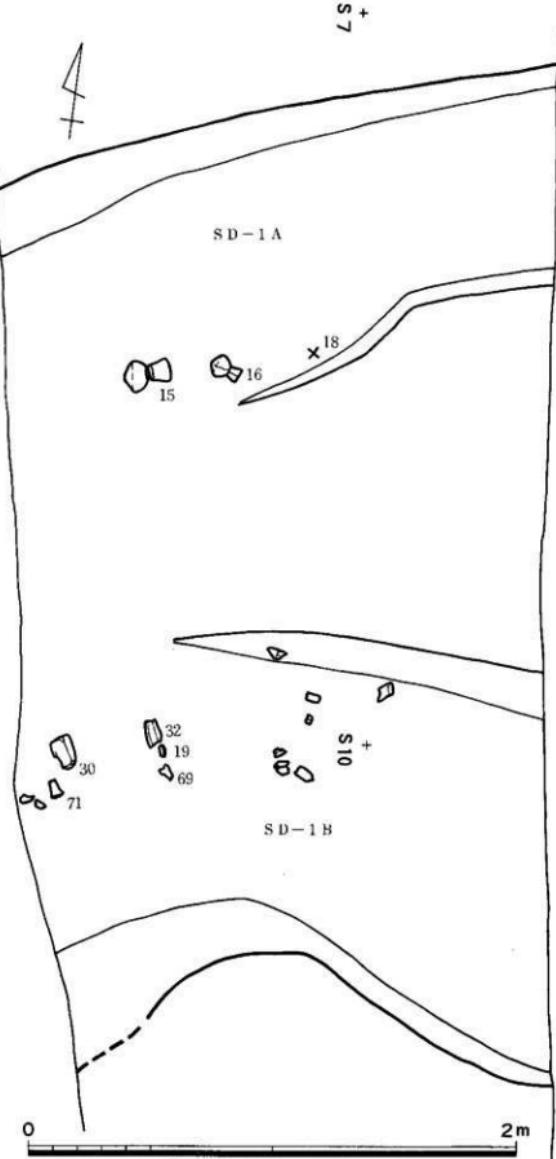
S X-1 W37~46で検出された緩やかな落ちこみで、最深35cmを測る。埋土は暗茶褐色土である。

2区(岡版一三)

1区の起点からN13°Wの軸線を設定し、幅1.8m、長110mにわたって調査区を設定した。2区の基本的な層序は、第Ⅰ層：耕作土、第Ⅱ層：灰茶色土で第Ⅲ層黃灰色砂粘土上面が造構検出面となる。調査区中部S50～65付近は、土手道の下にあたり、検出面が約40cm高くなるが、他では検出面の標高は110m前後である。S70以降では、第Ⅱ層の下に暗茶褐色の遺物包含層がみられるようになる。

検出された主な造構には、溝7条がある。その他、上坑・ピットが検出されているが、それらは、時期・全形が明らかでなく、ここでは特に説明はしない。ただし、掘り込み面からSK-4～6は後世の所産と判断される。

SD-1 試掘当初1条の溝として検出したが、調査の進行によって、別個の2条の溝であると判明した。北側の溝をSD-1A、南側の溝をSD-1Bとする。SD-1AはS8付近を北東—南西方向に走り、その西側でSD-1Bを切る。検出面での幅は2m、深さ40cmを測り、淡黄灰色砂質土、疊混りの暗茶褐色土が順に北側から流れこんだ状態で堆積する。SD-1Bは幅約2m、深さ60cmを測る。



第1図 2区SD-1遺物出土状況

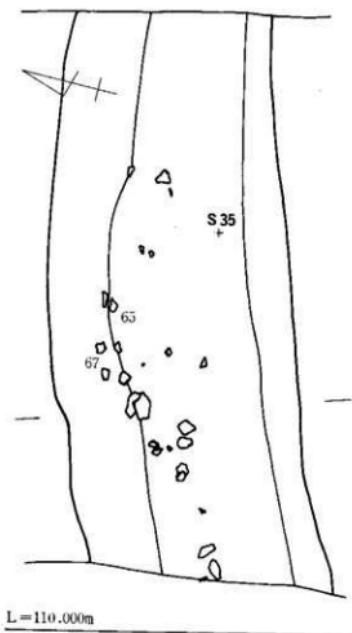
溝底に粘質土の薄い堆積をみた後、暗茶褐色粘質土により埋没している。A・Bともに土器が出土したが、SD-1 A出土品は完形に近い例が多い。

SD-2 S25付近を南へのふくらみをもちらがら北東一南北方向に走る溝で、検出面での幅は2.7m、深さ50cmを測る。断面は楕円状を呈する。溝底に暗灰色粘質土の堆積をみた後、暗茶褐色粘質土により埋没している。

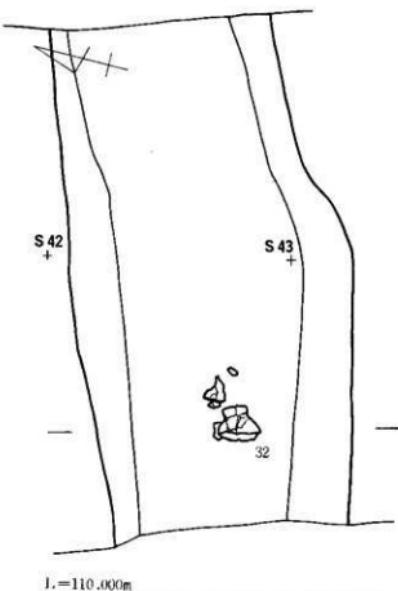
SD-3 S35付近で調査区を横切る溝である。検出面で幅1m前後、深さ50cmを測る。断面はU字状を呈する。土器が小片となって埋土上位から検出されている（第2図）。

SD-4 S43付近で調査区を横切る溝である。検出面で幅1m前後、深さ40cmを測る。断面はU字状を呈し、溝底北側壁際に灰褐色粘質土の堆積をみたのち、暗茶褐色粘質土により埋没する。検出区間のうち西側寄りの埋土中位で、壺が底部と体部が少しざれた状態で出土している（第3図）。

SD-5 S50を中心検出された溝で、上面で幅5m、深さ65cmを測るが、北半は明らかに削平されている。



第2図 2区SD-3 遺物出土状況



第3図 2区SD-4 遺物出土状況

底に幅広い平担部を持つ。溝底に部分的に砂・細砂の堆積が認められた以外は、炭化物と砂を巻きこんだ砂礫により、ごく短期間に埋没したような状況を呈している。この砂礫層に多量の弥生土器が含まれていた。

S D - 6 S 55付近を東西に走る溝である。幅0.5~0.8m、深さ20cmを測る。断面はU字形を呈する。

S D - 7 S 94~102にかけて検出された溝で、S 100付近でL字形に屈曲する。北西・南西及び東方へさらにのびる。検出面で幅1m以上、深さは45cmをはかる。断面はU字形を呈する。埋土中から、弥生土器甕のものと思われる土器片が出土しているが、細片のため図示できない。

3~5区

3・4・5区では明瞭な遺構は検出されなかった。わずかに3区の北端近くから南に向かつて下がる、沼沢地状の落ち込みを検出したにとどまる(図版六)。ここからは弥生時代前期の土器が細片となって出土している。4・5区では、地表下60~90cmの暗灰色砂質系の堆積層から山茶碗類が検出された。

(2) 遺物

今回の調査で出土した遺物は、砥石1点を除けば、上器類のみであり、その量は整理用コンテナにして10箱程度である。内、8割が1・2区出土のもので、残りが3~5区出土のものである。ここでは、図示したものを中心にして、1・2区は遺構毎に、3~5区については一括して、出土遺物をみていただきたい。

1区 S D - 1 出土土器1は、外傾して直線的にのびる壺の口頭部である。端部をヨコナデし平担面をつくる。

1区 S D - 2 出土土器(2~14) 2は直立気味にわずかに立ち上り、外傾して開く壺の口頭部である。端部をヨコナデして丸く収める。3は細くしまった頭部からゆるやかにカーブして開き、端部を上方に屈折させる壺の口頭部である。端部をヨコナデし、内傾する面をつくる。4も3と同形であるが、端部は丸く収める。5は強く外反して開く壺の口頭部である。ヨコナデを施し、端部に面を取る。6は内縛気味に外に開く頭部から直立して立ち上る口縁部をもつ壺である。7はわずかに内縛気味に開く部に、「ハ」の字状に開く短い脚部を備えた鉢で、略完形品である。口縁部及び脚部をヨコナデし、体部内外面はナデて平滑に仕上げる。8は器台の縁部かと思われる。内外面をヨコナデし、端部は上下にわずかに張り出す。10は中空の筒状部から屈曲して、内縛気味に開く縁部をもつ高杯である。脚部中位に四方から円孔を穿つ。外面はヘラミガキを施し、縁部内面には細かなハケメを施す。11は高杯縁部、12~14は壺の脚部であろう。

2区 S D - 1 A 出土土器(15~18) 15・16はともに小さな平底、下ぶくれの偏球形の体部をもち、しまった頭部から内縛気味に外上方にのびる口縁部を有する壺である。器高はそれぞれ17.2、12.2cmを測る。全面にヘラミガキを施す丁寧な作りである。16は外面の数ヶ所に赤彩痕がみえ、また、底部に焼成後の穿孔が認められる。17は内縛気味にのびる口縁部を有する高杯の杯部である。18は直線的に開く受部と、外反して開き、縁部が内縛する脚部をもつ器台である。端部を丸く収め内側にわずかに肥厚させている。

2区 S D - 1 B 出土遺物(19~30) 19は頭部上位で強く外反し、水平に開く壺の口縁部である。頭部外面にタテハケメを施した後、口縁部をヨコナデする。端部はしっかりとした面をもち、上下に少し広がる。下端に刷毛目工具により細かな刻目を密に施している。23は薄手の体部に厚手の口縁部を附加した壺で、端部は上方に立ち上る。体部上位に刺突列点文を施す。25・26は高杯の口縁部である。受部から外反して広がり、端部は下方に肥厚気味に丸く収める。30は硬砂岩を砥石に使用したものである。各平担面とも使用のあとがうかがわれる。

2区 S D - 4 出土土器 32は球形の体部にやや外傾してのびる口頭部がつく壺である。口縁部にヨコナデを施し、端部は丸く収める。体部は外面をハケメし、内面はナデる。底部内面にはクモの巣状にハケメが残る。

2区 S D - 5 出土土器(33~44) 33は外傾して直線的にのびる、壺の短い口頭部である。丁寧なヨコナデを

施し、端部は内傾する小さな面を取る。34は、外傾して直線的に短くのびる頸部に、水平近く外に開き、端部を上方に立ち上がらせた口縁部をもつ壺である。頸部直下に断面三角形の低い突帯を有する。頸部内外面にそれぞれ、ヨコ・タテの粗いハケメを残す他は、ナデあるいはヨコナデを施す。口縁端部外面に刺突文を羽状に施している。胎土に粗い砂粒を多く含む。37はやや胴上部の張った体部に、高い立ち上りをみせる口縁部のつく壺である。体部は外面をタタキのちハケメする。39は外反して開く高杯の口縁部である。端部は丸く收める。40・41は上下を失した器台の脚部である。それぞれ残存部下位に三方から円孔を穿つ。42は直線的に「ハ」の字形に開く高杯、または器台の脚部である。43は壺の体部下半で脚台をもつ。外面はナデ、内面はナデるが、一部に接合痕やハケメが残る。

2区包含層出土土器（45～51） 45～47は壺である。口縁部は、端部を上方へ立ち上らせるもの（45）、内脣してそのままおわるもの（46）、立ち上がらせた端部をさらに外方にひき出して「S」字状を呈するもの（47）等がある。49・50は壺である。49はわずかに外反しながら開く口縁部で、端部は外側に肥厚して面をもつ。50は球形の体部によくしまった短い口縁部のつくもので、端部は直立して面をもつ。

3～5区出土遺物（52～60） 52は内脣してひろがる壺の口縁部で、端部を内側に軽く肥厚させる。他に3区出土のものには、図版一六下に示す76～83など、弥生時代前期の土器がある。4区出土の53はやや厚手で、低平な三角高台をもつ山茶碗である。5区出土の山茶碗（54～58）は、高台が低平な三角形、或いはそれがつぶれた台形状を呈する。59は小碗で、薄手の器體に断面台形の低平な高台がつく。これらの山茶碗のうち、56・58以外のものの外底面には糸切痕が残る。60は白磁碗で、わずかに内壁気味の体部に、大きな玉縁状口縁がつく。淡緑色の釉が残存部全面に薄く施されている。

4. まとめ

今回の調査で検出された2区の遺構群のうち、SD-7はその形状からみて方形周溝墓の周溝である可能性が考えられよう。また、SD-3・4についても、その形状・埋土の類似は、この2つの溝が本来、同一の目的のために掘削された可能性を示している。そういう目でみると、SD-1・2についても同様に、一つの周溝の北部と南部が調査区に位置したものと解釈することができるであろう。これらは出土した土器から、弥生時代後期～古墳時代初頭に年代上の位置を求めることができるものである。当地における今後の調査の進展の如何によっては、越前塚・国友など周辺の同時期の遺跡との関係において、古墳時代開始期の様相がより明らかにされるものと思われる。

また、3区で少量ながら出土した弥生時代前期の土器は、川崎遺跡に提点をおいてひろまってきた弥生文化が、きほどの時間をおくことなく、当櫻木町周辺に根をわろしていたことを示す。同様に、今まで少量の上器が採集されているものとして、宮司・十里町・長浜北高などの跡が知られ、当地域における初期弥生人達の活動な生業活動の一端がうかがえよう。

註

- (1) 昭和50年度発掘調査
- (2) 宮成良佐・佐野誠一「長浜市越前塚跡略報」（『滋賀文化財だより』1983年）
- (3) 大江まさる他「国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書」滋賀県教育委員会 1971年
- (4) 宮成良佐「長浜平野における前期弥生式土器資料」（『近江地方史研究』19 1984年）

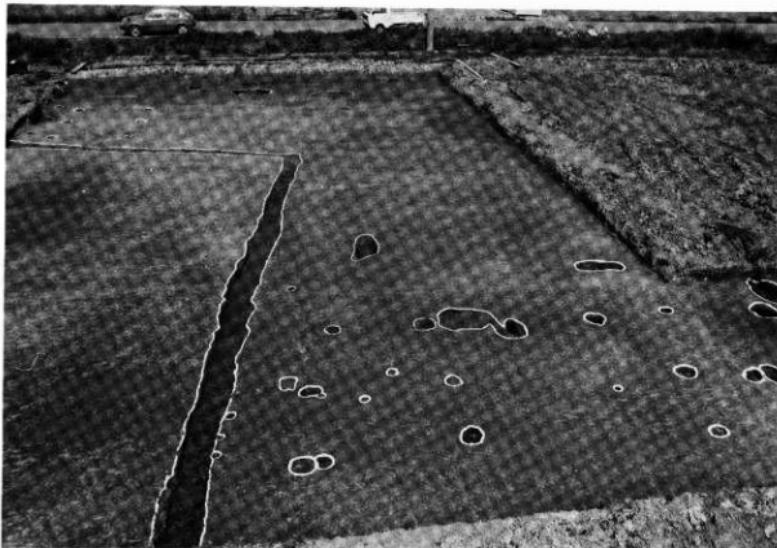
神照寺坊・泉町西遺跡図版



(1) 調査前状況



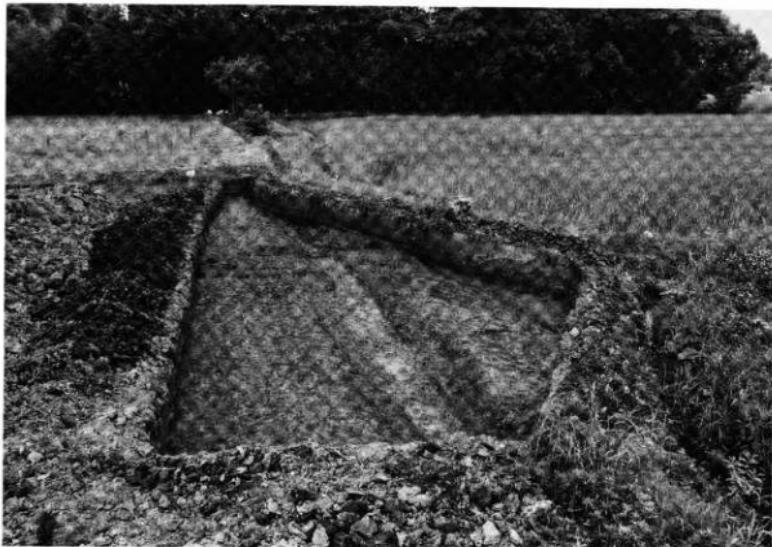
(2) I.U.地区全景(南から)



(1) HM地区全景（西から）



(2) HM地区東部



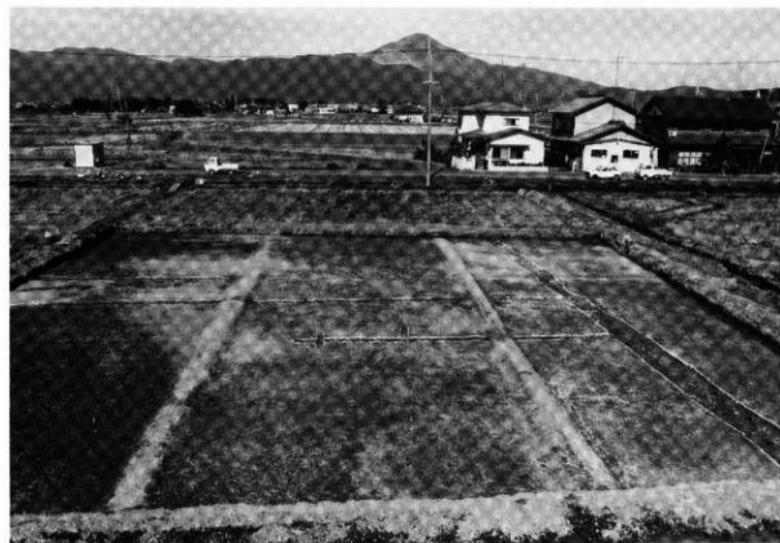
(1) HMW地区全景(北から)



(2) HMS D-3 木製品出土状況



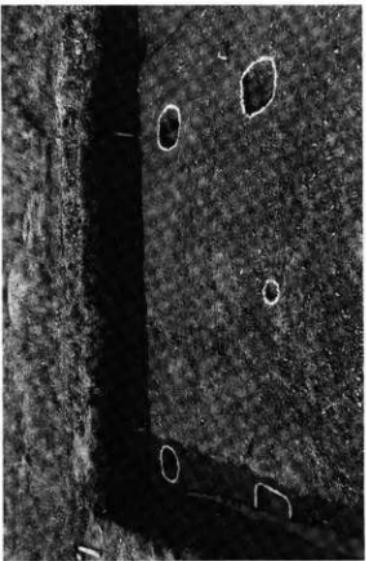
(1) MK地区全景（北東から）



(2) 同上（西から）

神照寺坊遺跡
遺跡

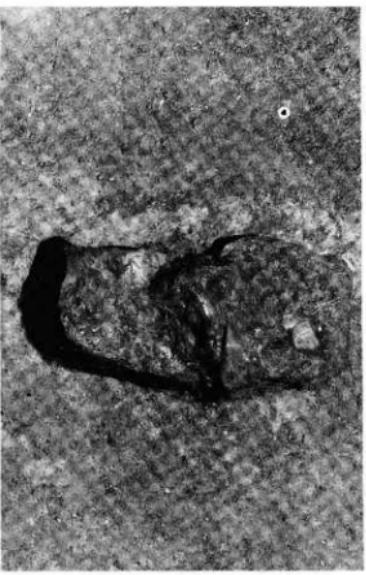
(3) MK・SB-1



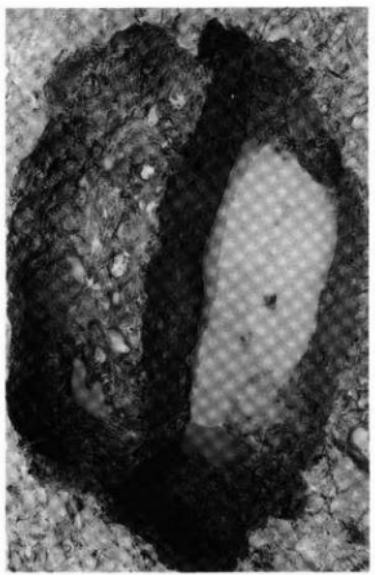
(1) HM・SK-5

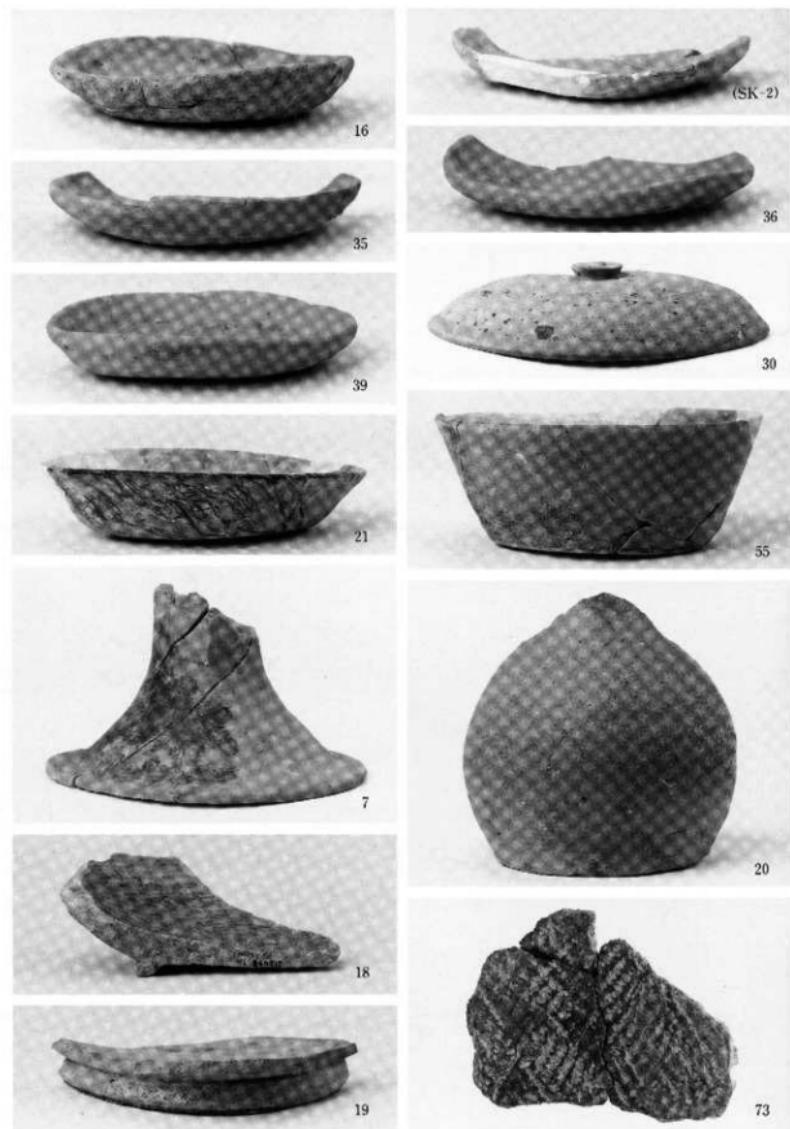


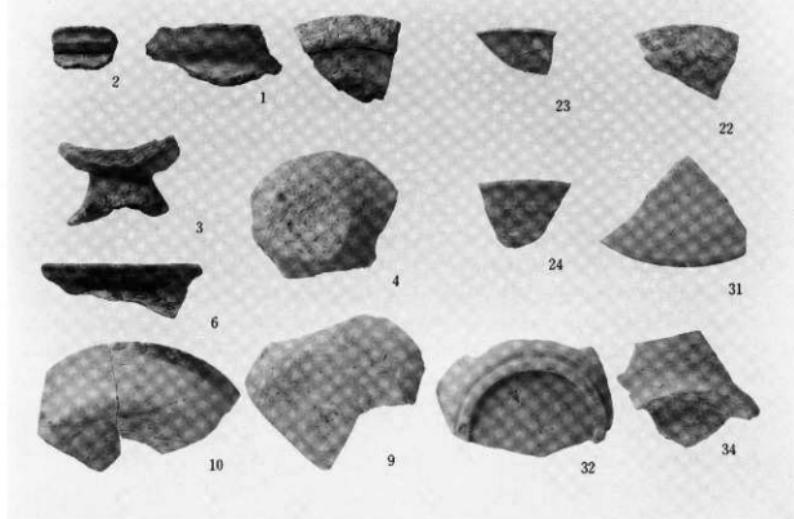
(2) HM・SK-2



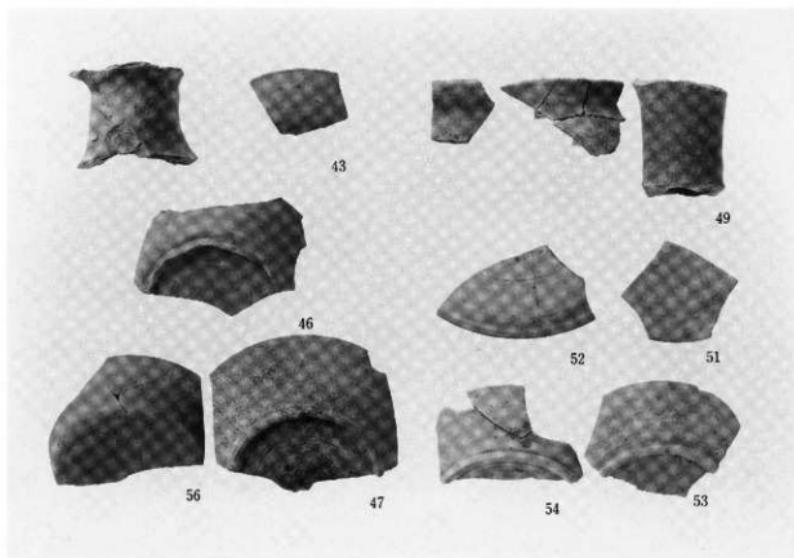
(4) HM・SK-4



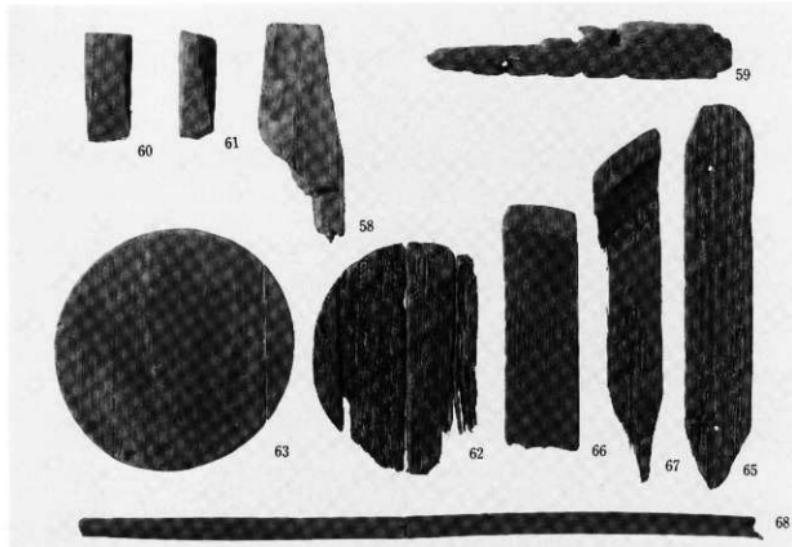




(1) IU地区(左) HM地区(右) 出土土器



(2) HMW地区(左) MK地区(右) 出土土器

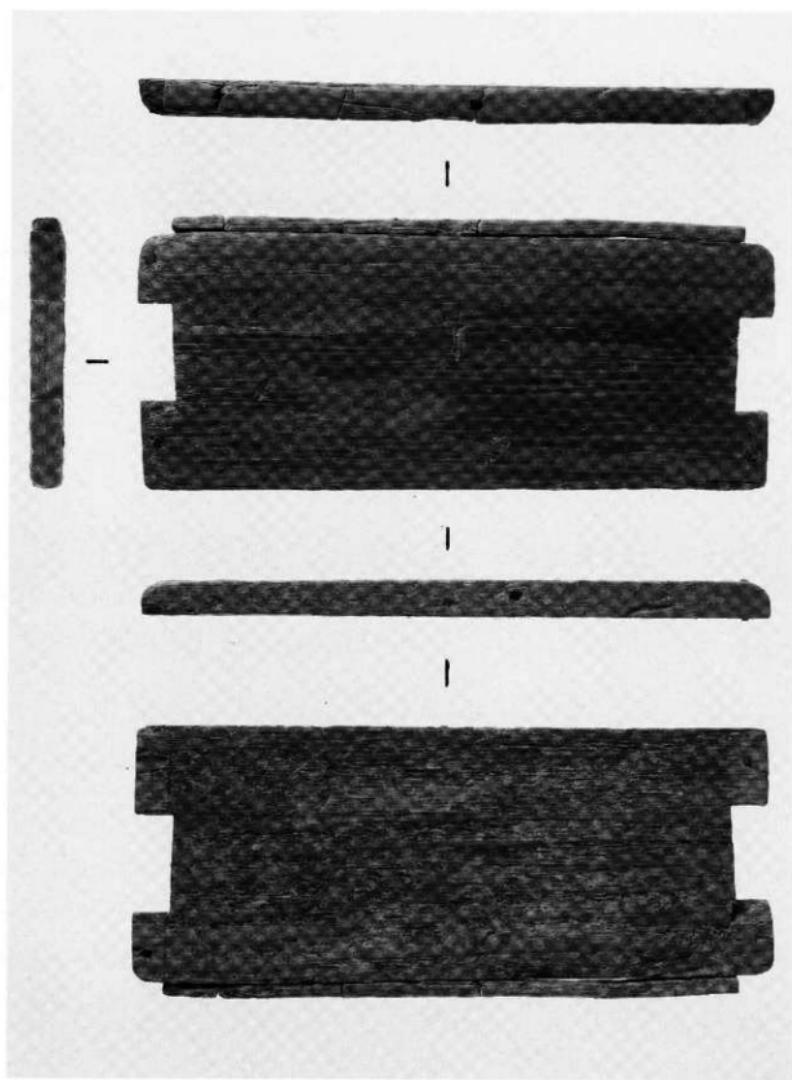


(1) 各地区出土木製品



(2) 木箋 (69)

(3) 木箋 (70)



側板 (71)



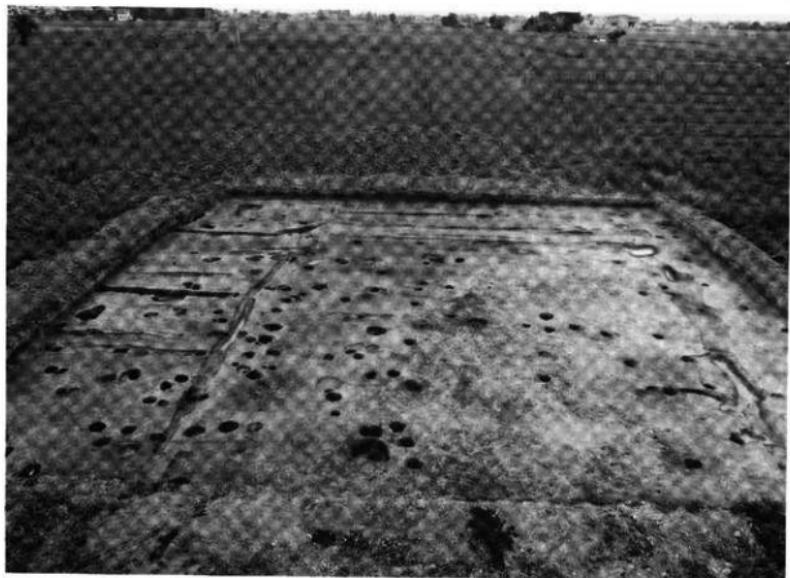
(1) 調査前状況



(2) 4区全景(南から)



(1) 1区全景(南から)



(2) 同上(東から)

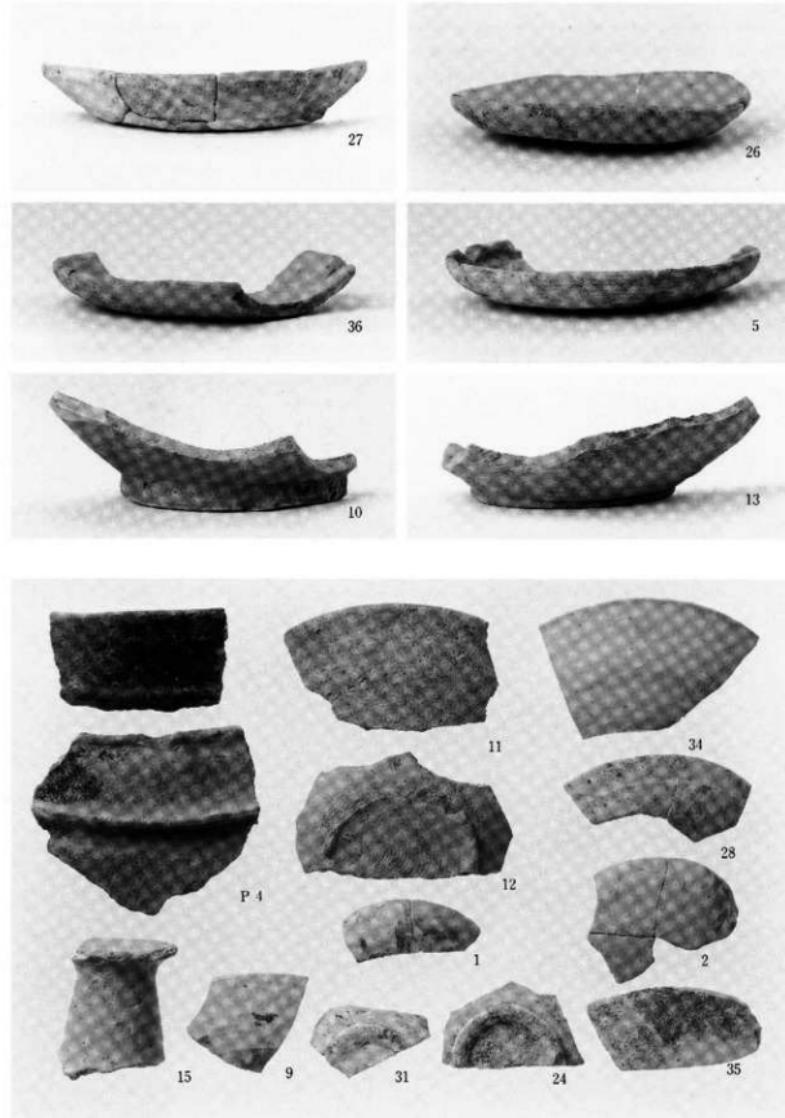
図版一二
泉町西遺跡
遺跡



(1) 3区全景(北から)



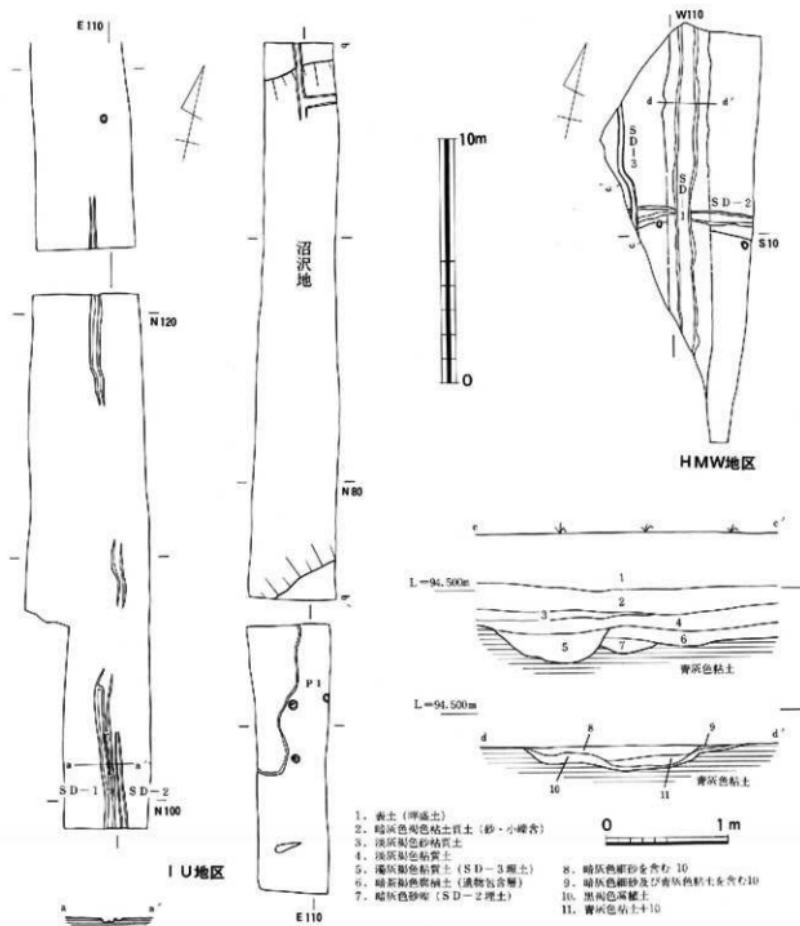
(2) 3区SE-1付近

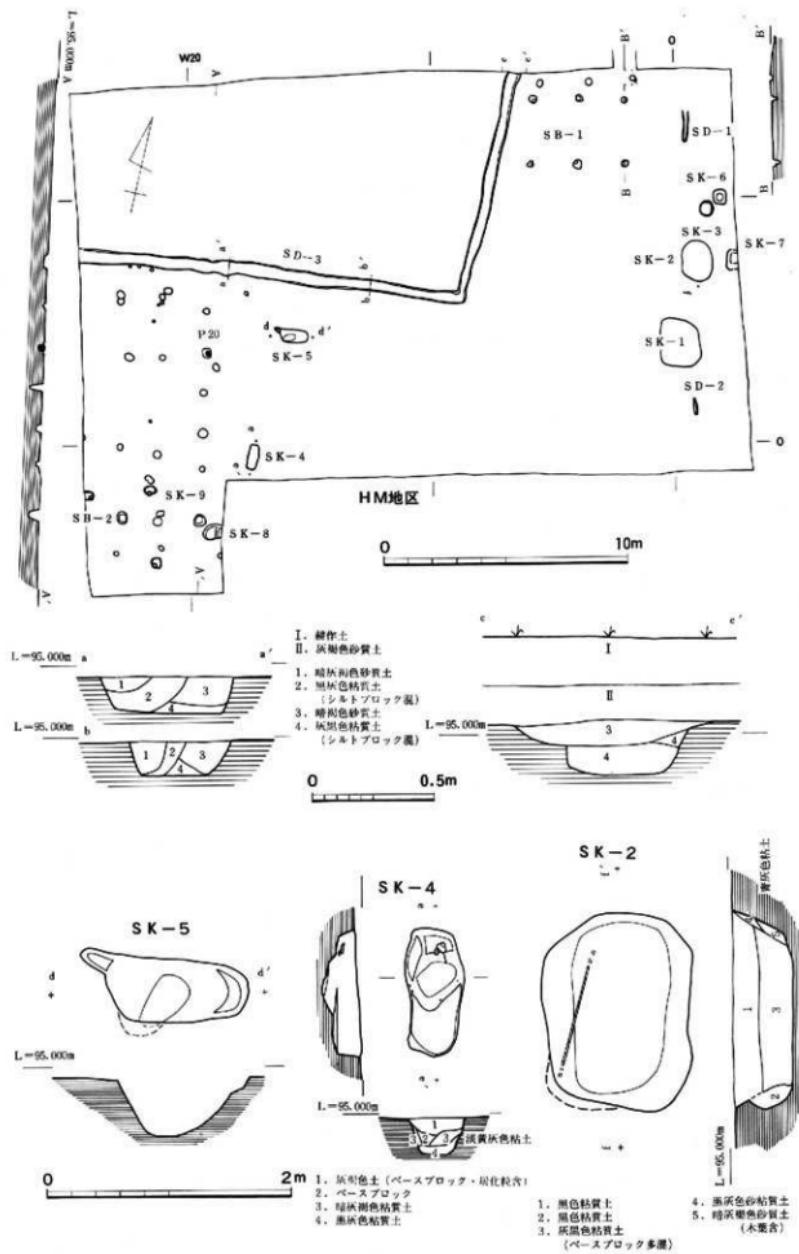


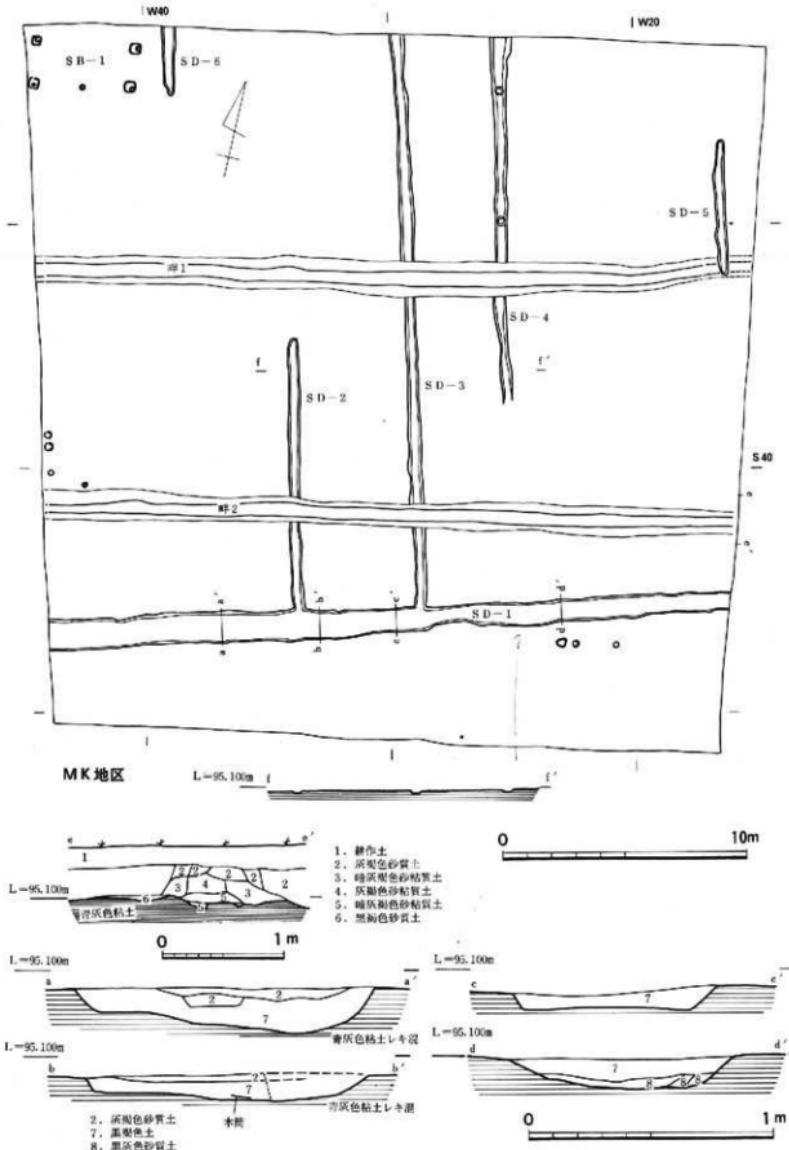
圖版一四 神照寺坊遺跡 泉町西遺跡 調査区



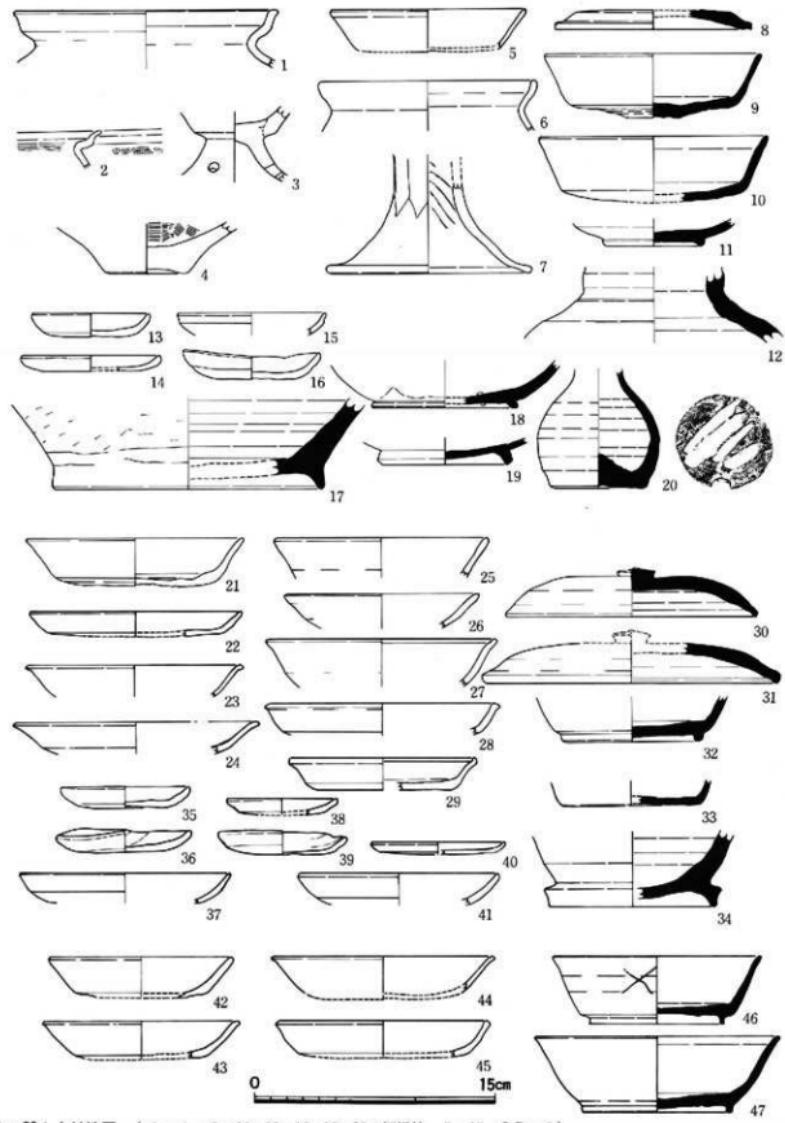
図版一五 神照寺坊遺跡 遺構







圖版一八
神照寺坊遺跡
遺物

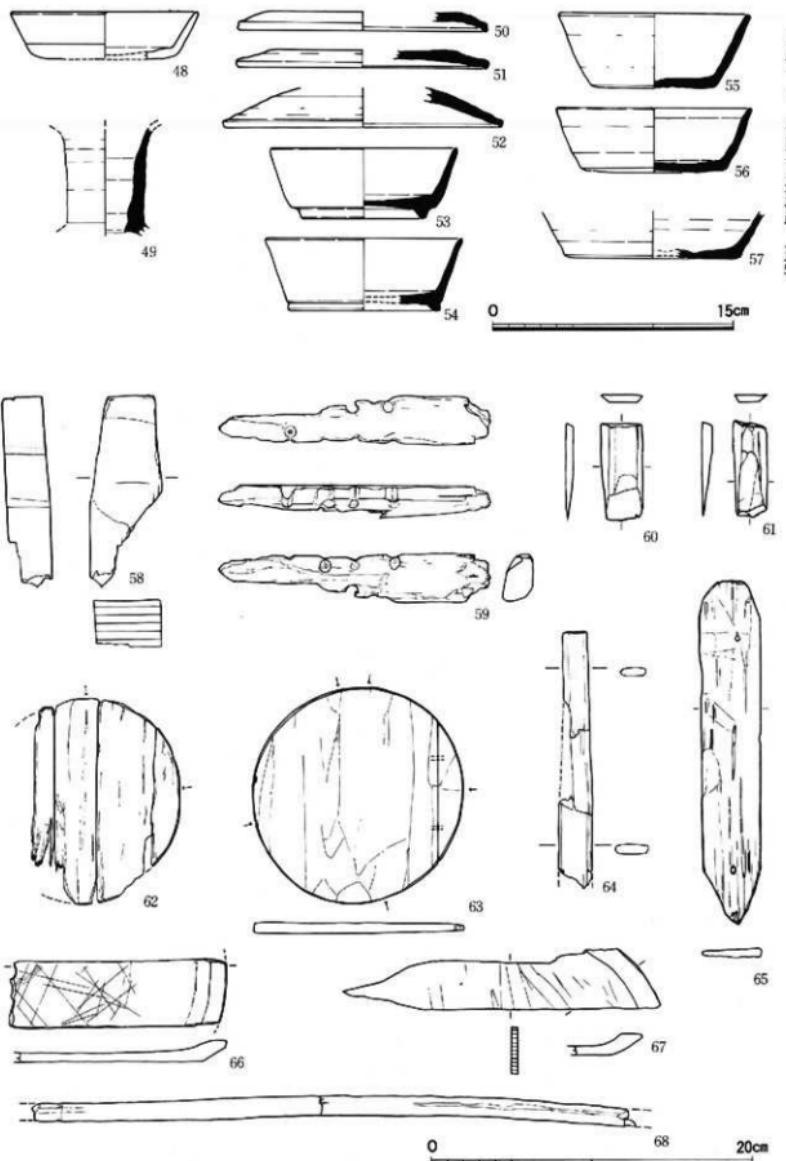


1~20: I U 地区 (1~4・6~10・12・16・18~20: 沼澤地 5・15 SD-2)

21~24: HM 地区 (21~24: SK-4 25~28・30~32: SK-8 29・33・34: SD-3 35~37: SK-2
38・39: SD-1 40・41: SD-1 40・41: SB-1)

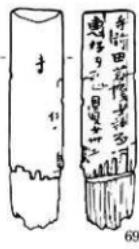
42~47: H MW 地区 (42~44・47: SD-1)

図版一九 神照寺坊遺跡
遺物

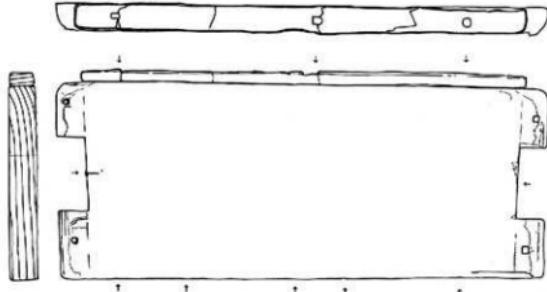


48~57: MK地区 (48·49·51~56: SD-1 50: SD-3 57: SD-4)

I U地区 (58·59) HM地区 (63) MK地区 (60~62·64~68)



69



70



71

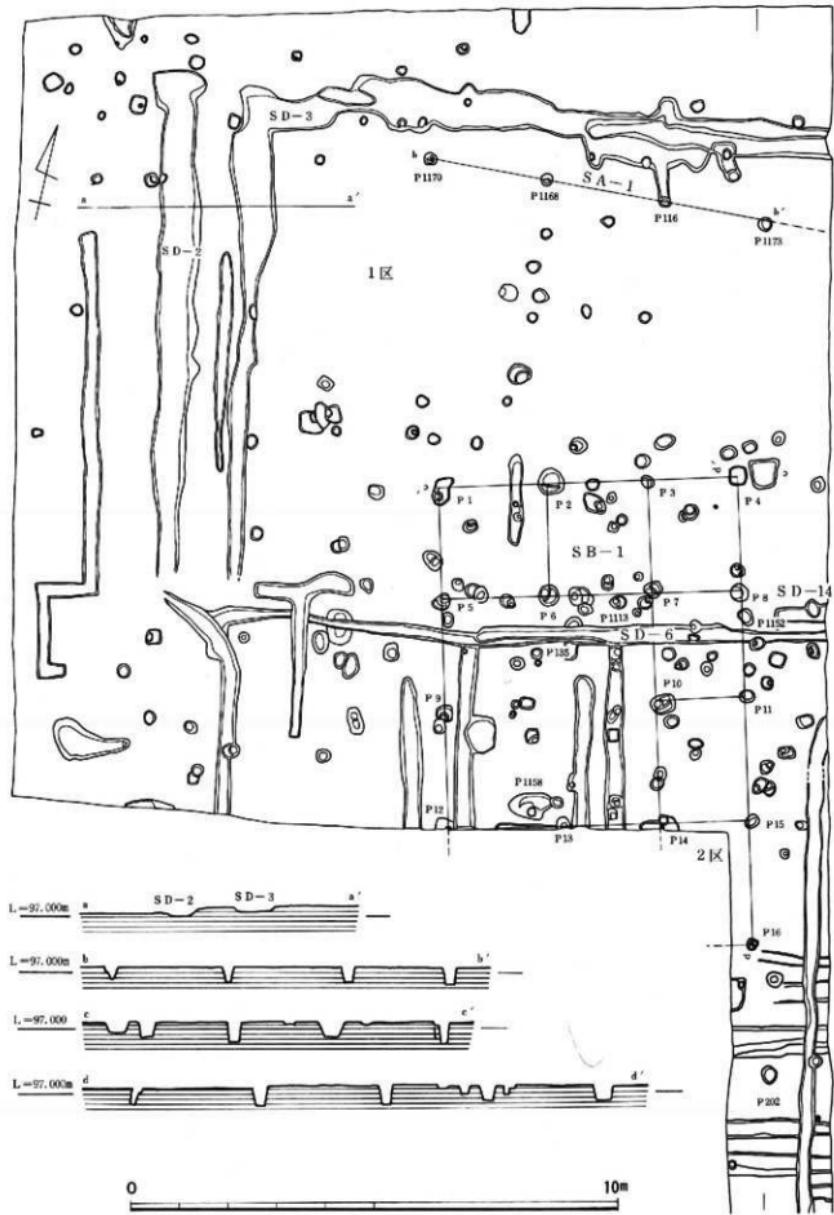


72

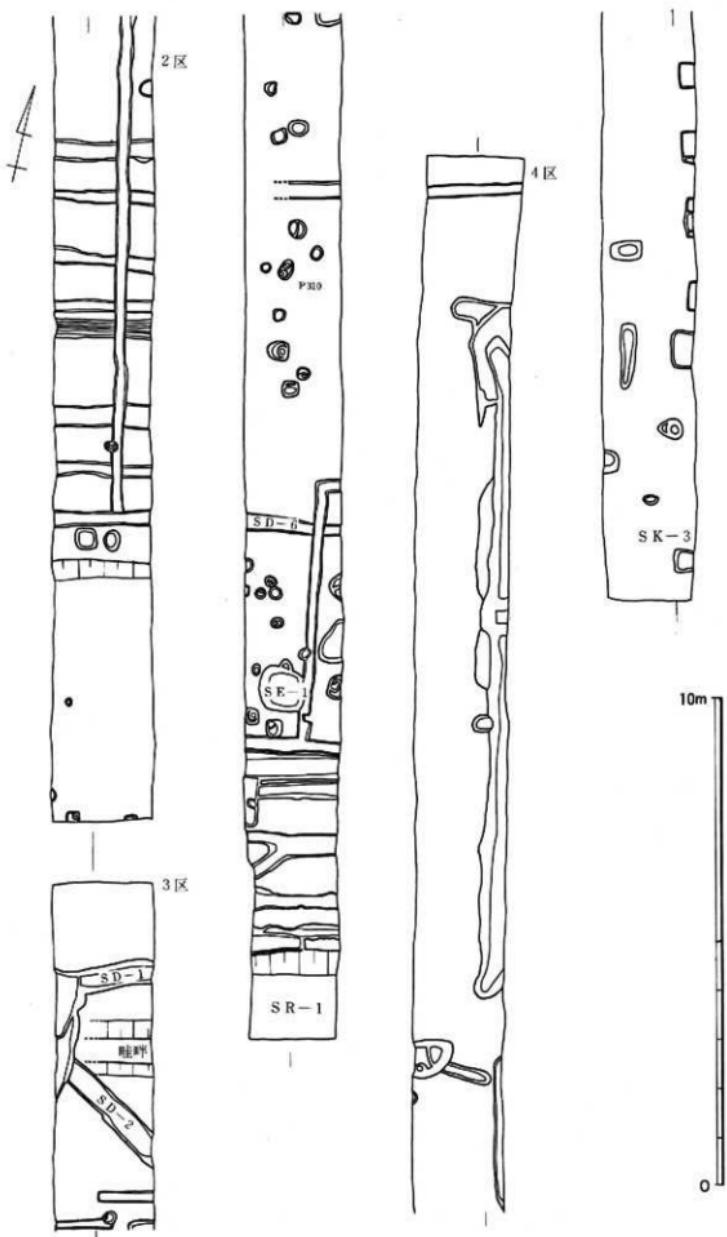
MK地区 (69・70)
HM地区 (71・72)

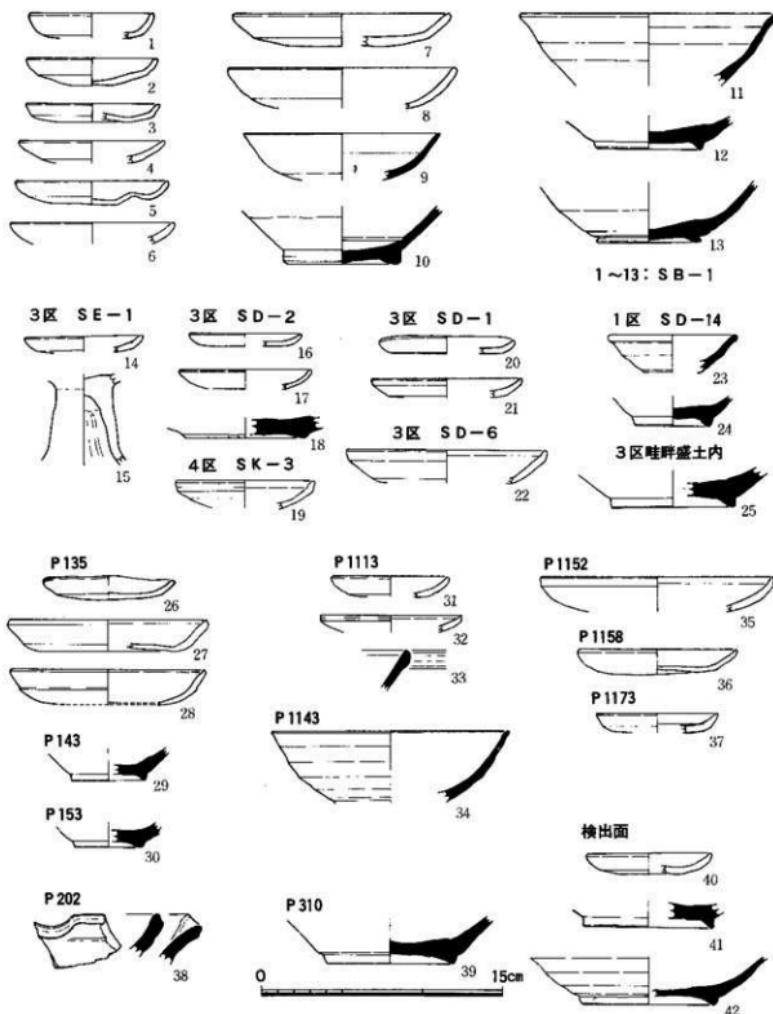
0 20cm

図版二一 泉町西遺跡
遺構

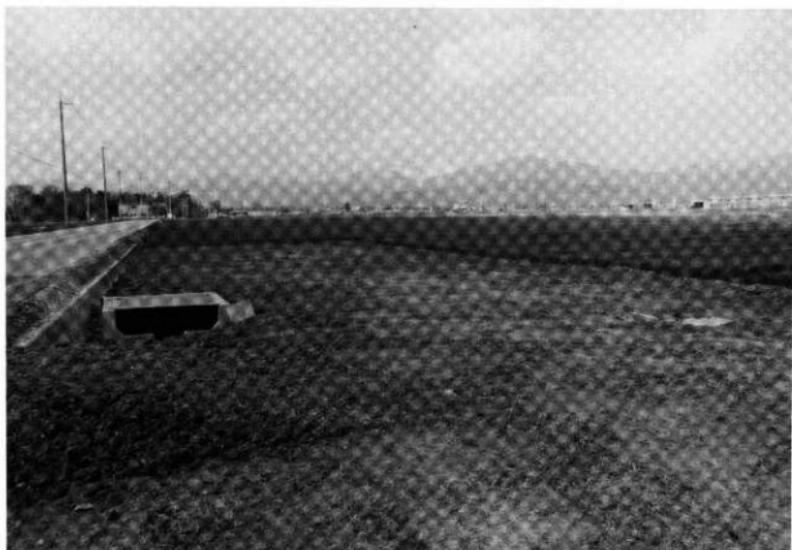


図版二二 泉町西遺跡 遺構





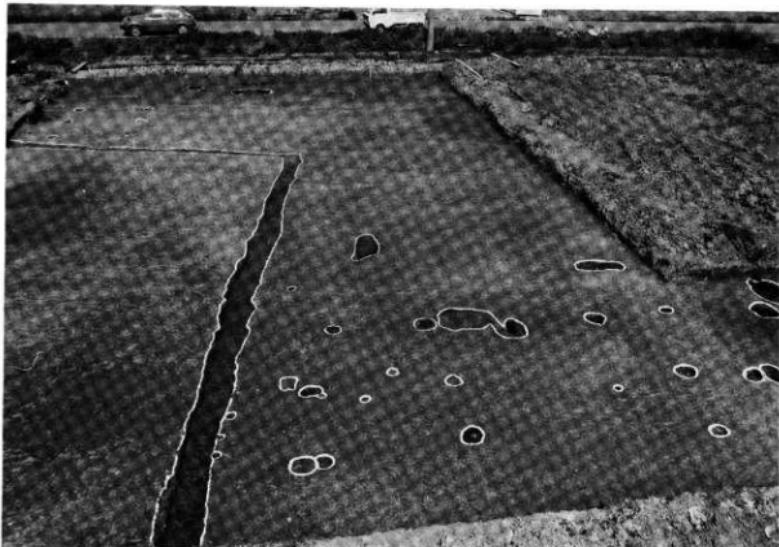
松塚遺跡図版



(1) 調査前状況



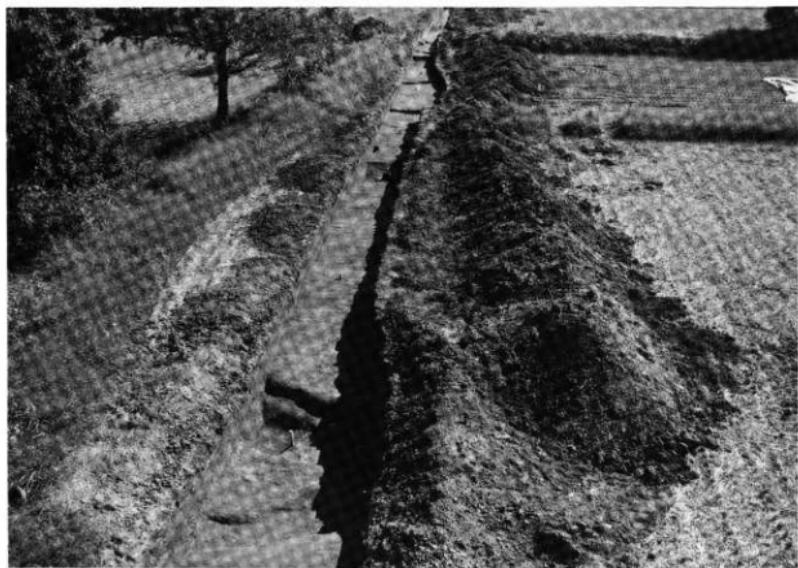
(2) 調査風景



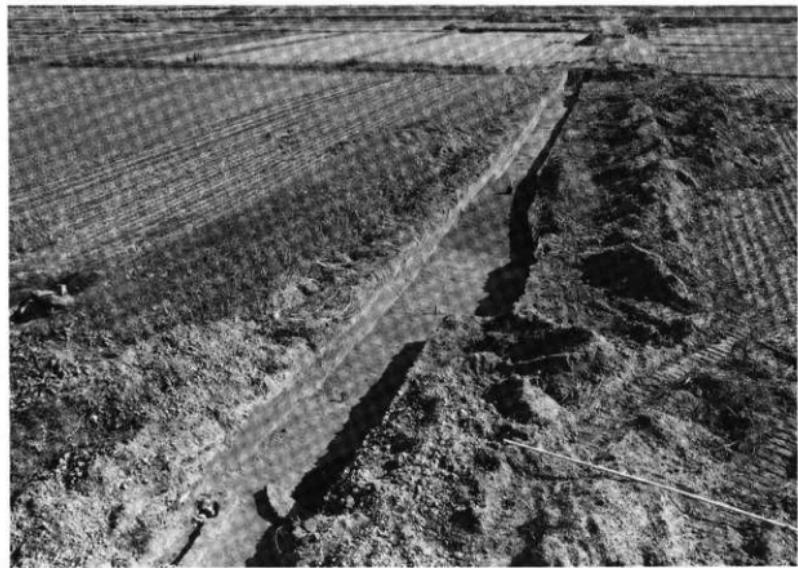
(1) HM地区全景(西から)



(2) HM地区東部



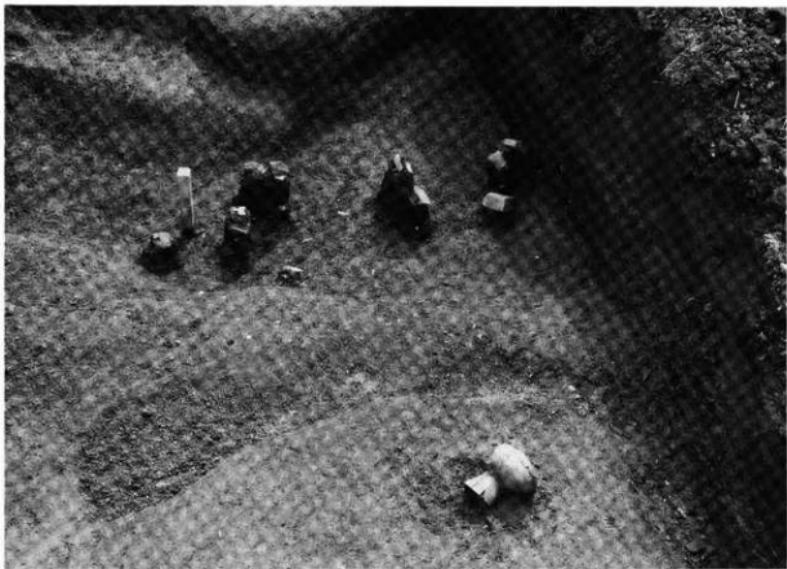
(1) 2区全景(北から)



(2) 2区南半(北から)



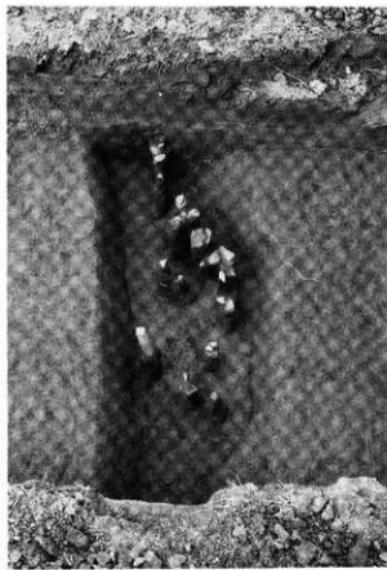
(1) 2区SD-1(手前)とSD-2



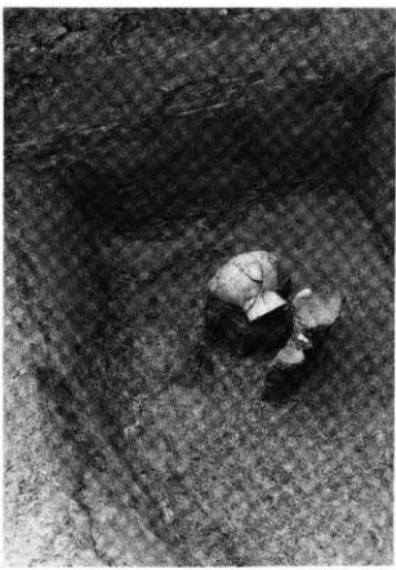
(2) SD-1遺物出土状況



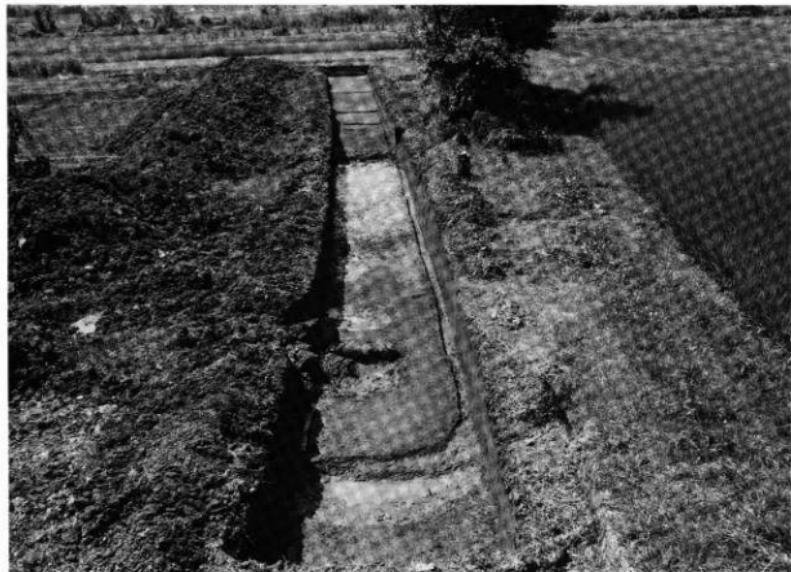
(1) 2区SD-3(左)とSD-4



(2) SD-3遺物出土状況



(3) SD-4遺物出土状況



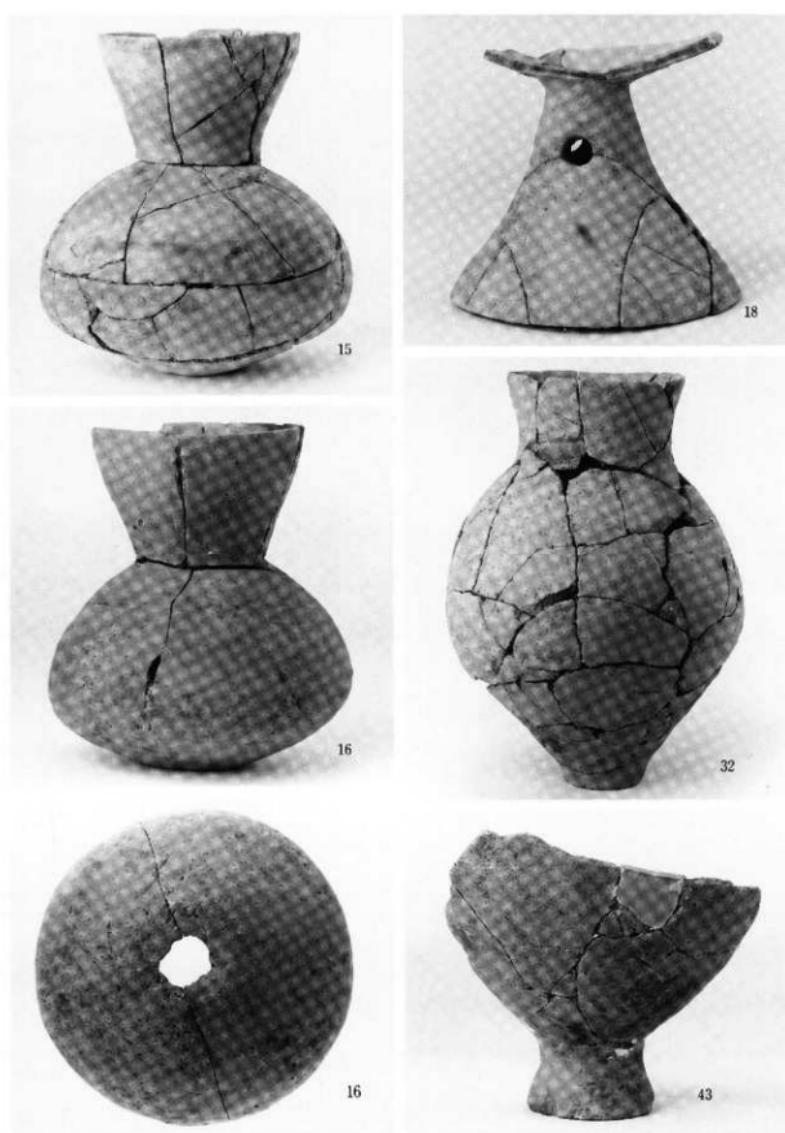
(1) 3区全景(北から)



(2) 3区沼沢地堆積状況



(3) 5区全景(西から)



図版八 松塚遺跡 遺物



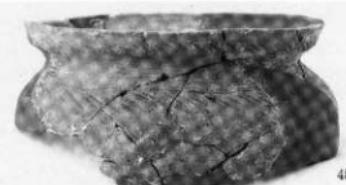
7



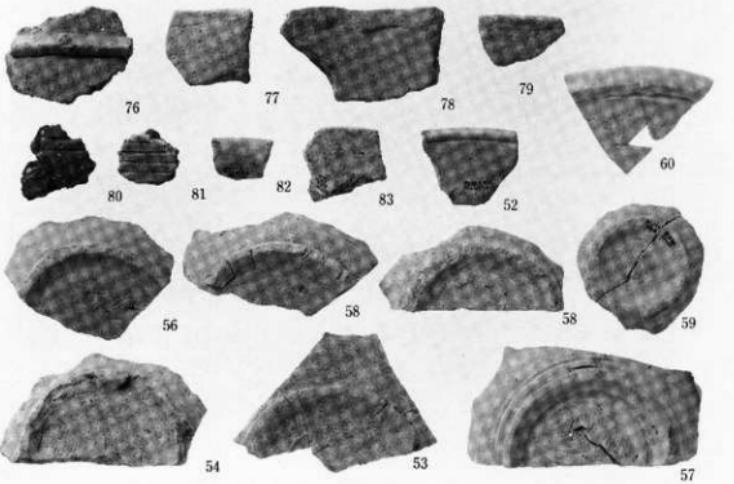
50

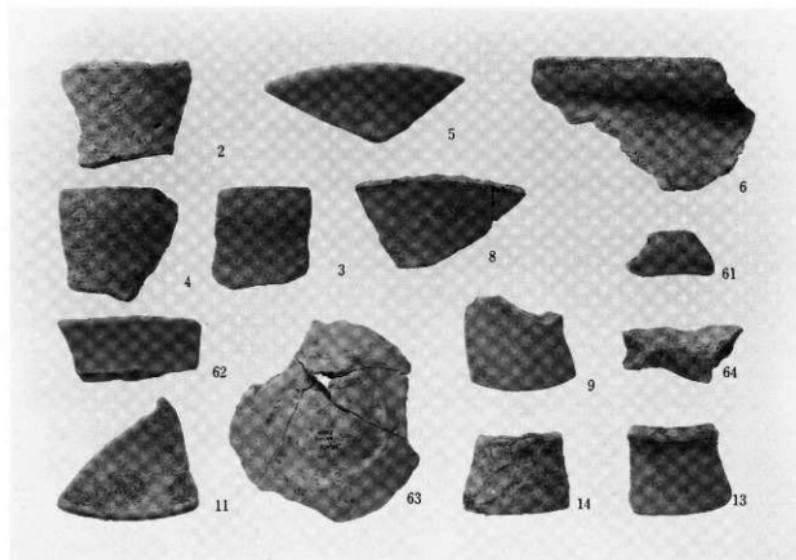


10

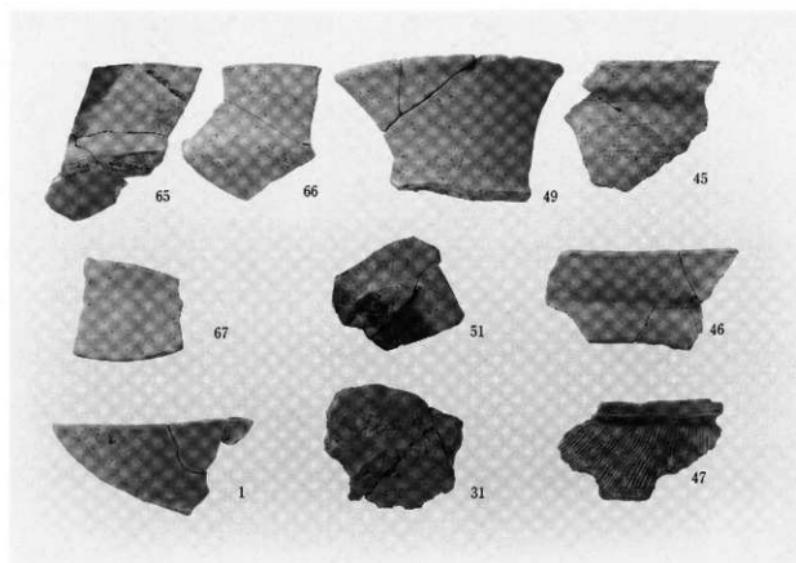


48

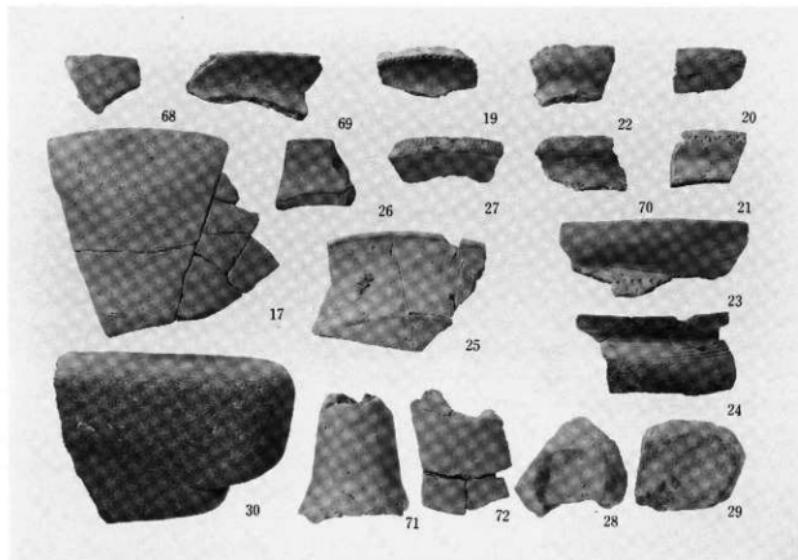




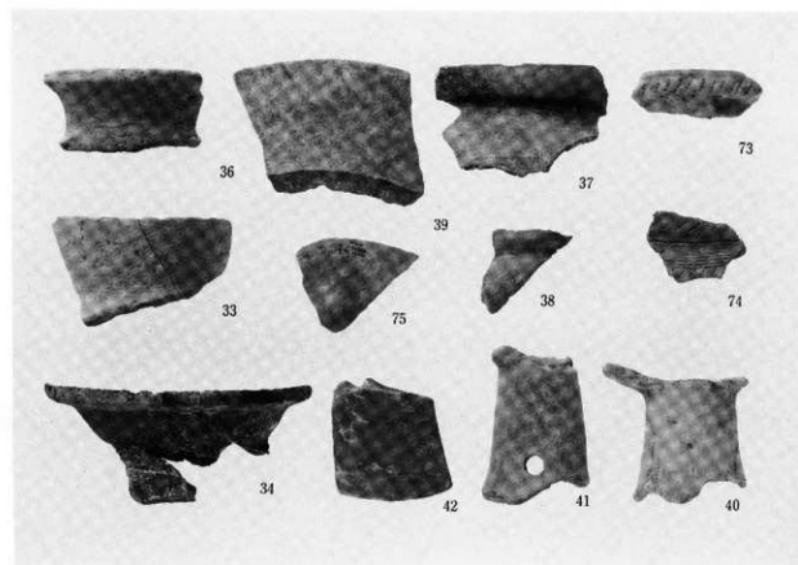
(1) 1区S-D-2出土遺物



(2) 1・2区出土遺物



(1) 2区SD-1出土遺物

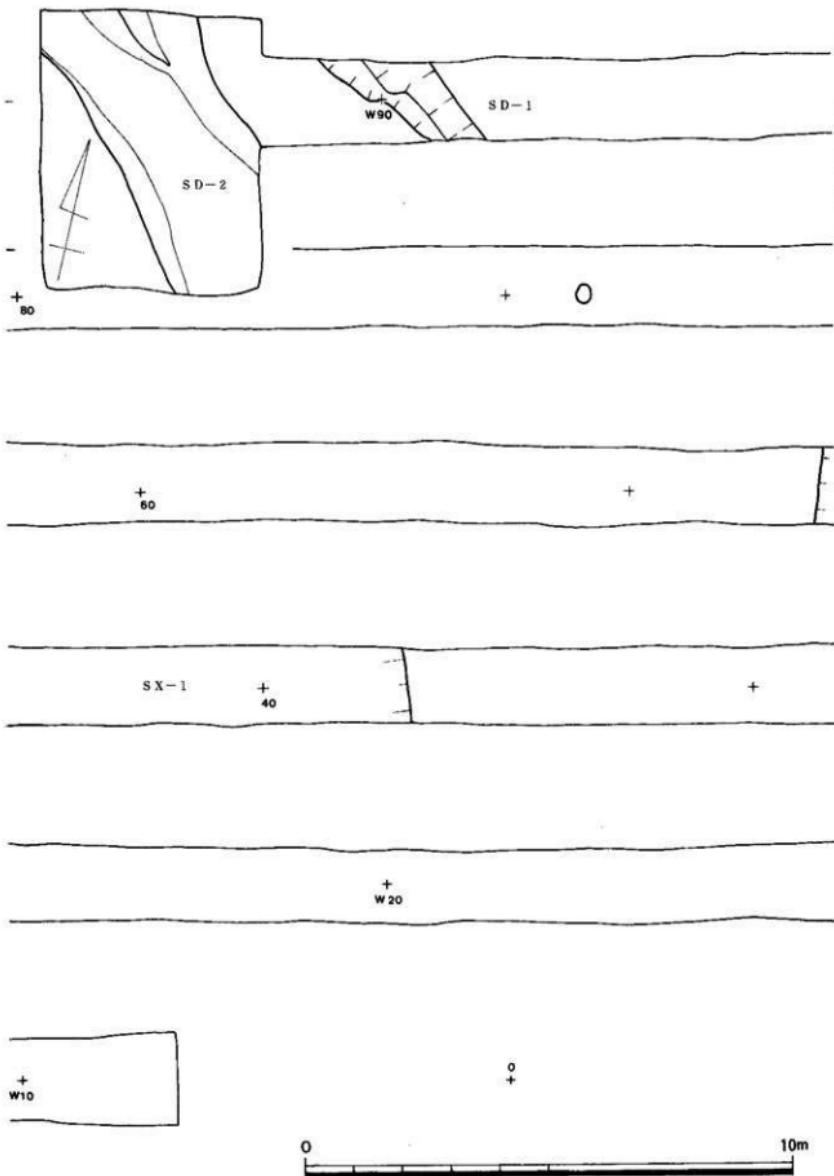


(2) 2区SD-5出土遺物

図版一一 松塚遺跡 調査区

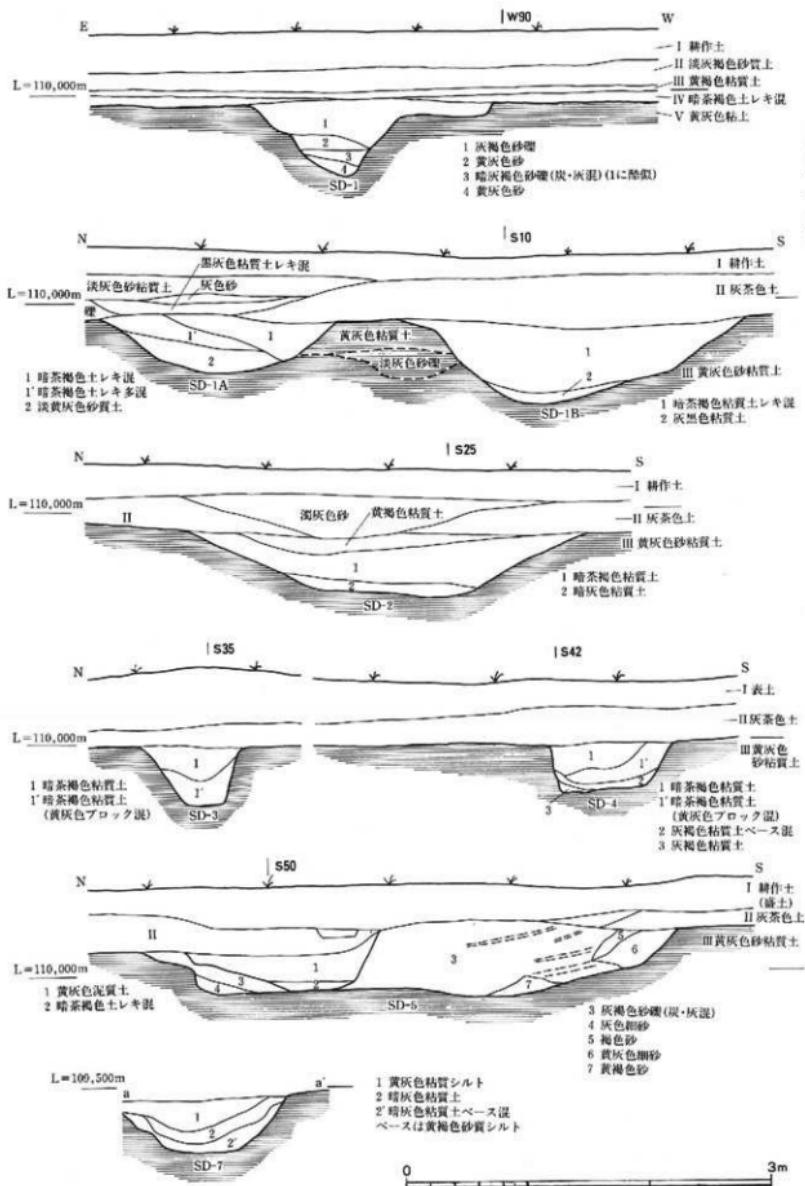


図新二 松塚遺跡構造

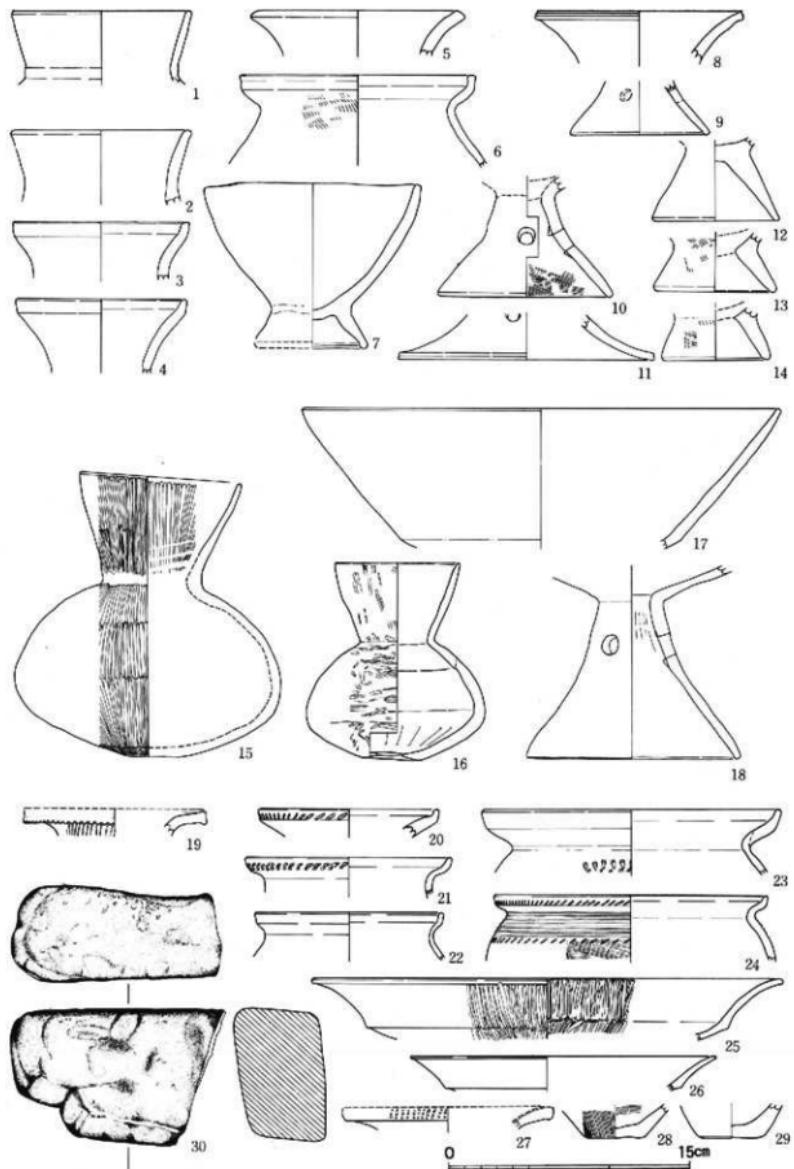


図版一三 松塚遺跡 造構





圖版一五
松塚遺跡
遺物



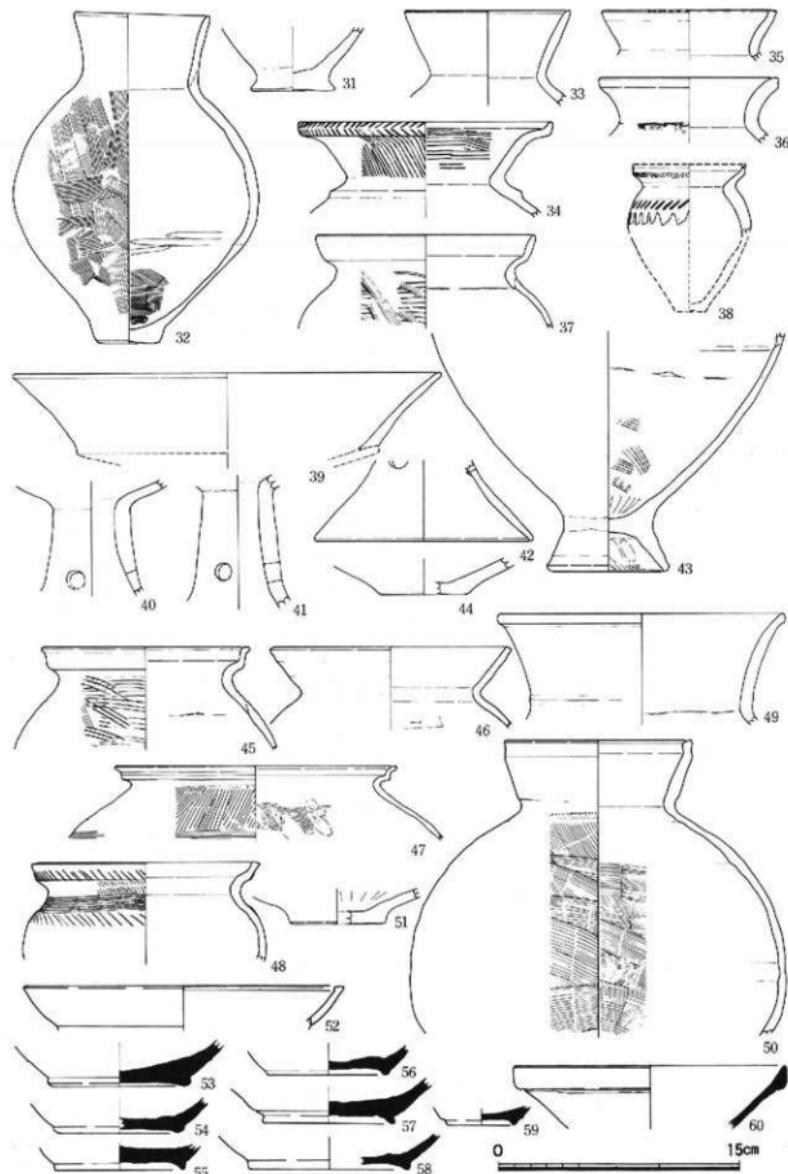
1区SD-1(1)

1区SD-2(2~14)

2区SD-1A(15~18)

2区SD-1B(19~30)

図版一六 松塚遺跡 遺物



2区 SD-2 (31) SD-4 (32) SD-5 (33~44) 2区包含層(45~51) 3区(52) 4区(53) 5区(54~60)

昭和62年3月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XIV-1

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121 内線 2536

(財) 滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大曾町1732-2

電話 0775-48-9781

印刷・製本 株式会社 醍醐 同朋舎